教科書として最も適當なものなんである。吾人は眞に理解なき結婚はノラに等しいと思ふ。眞の戀愛の結晶が結婚と言ふ形式を取つて男女を結合させるのだ。ラッセル――有名なるラッセル、諸君は現代の文化と思潮を考へる時、おそらくラッセルの名は忘れはすまい。――其のラッセルが夫人に非ざる一女性を伴つて居ると言ふ事だ。或人の問に答へて「法律とか結婚とか言ふ無用の手續を除いては完全なる我愛妻である」と言つたと言ふ。眞の妻は如斯なければならぬ。眞に夫を理解し眞に男を理解した女性は、たとへそれが結婚とか法律上の無用な手續を除いても、ソレが眞の妻であるんだ。愛なき妻と同棲する事は、娼婦と同居して居るのと等しいんだ。現今は此の愛なき妻が澤山ある。否とよ日本の女性の總てが此の愛なき妻であり妻となるものである。之教育の罪である。平塚雷鳥女史の同棲問題なんか問題でも何でもない。當然の事だ。私は平塚女史の高說に常々感服して居る者であり、我國のエレンケイとしてケイ女史に劣る人物ではない。かゝる天才的思想的女性の出現を日本は尙々作らなければならぬ。

小學校や女學校で男女の問題として隨分にやかましう言はれて居る事なんか殆んど問題ではない。同職にある男女教員の戀愛事件なんか實に美事な教育的行爲ではないか。戀愛もなし得ざる腰ぬけ教員の多き事には驚く。愛なき女性が家庭の主婦となると一家はドウしても治まらぬ。温味がない。和氣靄々とした家庭は出來ぬ。女の生命は愛である。愛は女の神より受けて男子に與ふべき使命である。ソコで家庭に愛なき時は男は外に快樂を求める事になる。昔から妻を持ちながら花柳に身を運び遂に如何ともする事の出來ぬ破目になる男子が澤山にあるが、之等は決して男子の罪ではない。其の依て來る原因は女子にある。たしかに女子が悪いんだ。ソンな家庭を持ちながら外に出て道樂もなし得ざる男子はソレこそ腰ヌケである。所が困つた事には現今の日本の各種の家庭は多く愛なき妻の經營する温味なき氷の家である。之確に現今の女子教育が誤つて居るからだと思ふ。

鈴木三重吉氏の妻君が急雨の際に夫の思索をさまたぐるを恐れて雨水を他へよけて音を少なからしめたと言ふ事を聞いた。之位な妻君を持たなければ人間として生れた

價値があるか。北原白秋氏の夫人章子氏が去つたのも一面たしかに賢婦人たるべきの要素を有して居る。彼の國際法學の開祖とまで賞賛さるゝグロチウスの夫人マリアを見よ。グロチウスの偉大なる事業をかくまでに成功せしめたのは確に夫人の力だと稱して可なりだ。妻の爲にグロチウスは彼の大事業を成し了へたと言つて良い。己が身命を夫の身命に打ち込んでしまつた所に彼の偉大なる事業は出來たのだ。現今の女子教育を受けた者の中に果して一人のグロチウスの妻ありやだ。

私は現今女子教育を受けた、ソシて優等生と言はるる愛もなければ人つきの悪い女の人々を見てお氣の毒に思ふ。彼等の内には卒業するや直ちに結婚する者もある。即ち子供の時代から一飛びに妻の時代に遷る。此の間に戀愛の時期を持たぬ。眞に氣の毒なものである。却説結婚したからとて戀愛を知らぬ女子は男子――夫――に對して十分の愛を注ぐ事すら成し得ぬ。ノラは自覺したが自覺しないで――爲し得ないで――離婚となつてしまふ。人生の大半はかくして悲慘なる生活を送るのである。數學者や物理學者には時々戀愛を知らぬ人間がある。之は不具者である。現在の女子教育は

不具者を養成しようとして居る。世に醜關係と言ふ事があつて男女問題が起るとすぐに此の言葉を持ち出す。困つた奴の多い世の中だ。一人の立派な青年が一人の美しい胸の女子と、お互に妻と定め夫と呼ぶに何所が醜關係なんだ。夫婦と契るのが醜くければ醜く、ない者は世界に殆んど一人もない筈だ。若しあれば不具者である。法律や結婚てふ無用の手續を除いて眞に夫と愛し妻と呼ぶのが何が醜くいんだ。私は二三年すれば三十歳になるが、此の年になる迄に一人のかゝる女を發見しない。幸か不幸かは別問題としても、かゝる相思の女性を發見したる男子や、かゝる戀の相手を發見したる女子は眞に幸福と言はなければならない。私はかゝる心命を夫になげ込む樣な相思の女性を發見したらドンナに幸福だらうと思ふ。

父母の定めたソノマゝの女子や男子が結婚の眞諦も理解せずして盲目的に形式結婚をなすの輩こそは實に半人前の人間にして機械と何等異なる所がない。彼等は動いて居る。けれども水も動いて居る風も動いて居る。彼等はかくして生活して居る。しかし犬も猫も生活して居る。彼等は機械である。人間ではない。人間として最も尊かる

べき愛の世界を頑固なる父母や親族に奪はれてしまつたのだ。古風に言へば親孝行だと言へるだらう。犬でも猫でも雄と雌とを一室に置けば、食物は食ふ。呼吸もする。色欲もあるから交尾もする。しかし愛がない。戀がない。現今の女子教育は此の半人半獣の教育をして居るんだ。

所で現在教育者自身も戀愛についての思ひ切つた考へがないらしい。盗賊でなければ盗賊の番は出來ぬ。或る大名の御倉番を志願した者があつた時「お前の樣な者でお倉番が出來るか。」と言はれて「私は物を盗むだ樣た事は過去に於て一回もありませぬ。」と言つた相だ。スルと「人の物を盗んだ事のない樣なものが盗人の番は出來ないんだ。」眞の戀愛の何たるかを理解せしむる教育を施す教育者は教育者自身が過去に於てすでに眞の戀愛を經驗したものでなくてはならぬ。私は此の意味に於て教育者は皆美しい教育の神でなければならぬと思ふ。

私が此所迄書いた時女中が本日の讀賣新聞を持つて來た。開けて見て面白い話が出て居る。藝者屋や待合屋などの子女を女學校へ入學を許可するかどうかと言ふ問題で

ある。問題にも何もならぬ事を問題として居る。考へて見るが良い。其の本人の何所に罪ありやだ。花は下枝にも美しいのがあり高き枝にも決して美しいのばかりではないから、例へソレが藝者屋の娘であると私生兒であるとの論なく入學せしむべきでものであらねばならぬ。所で東京や京都あたりの女學校には之等の子弟を拒否して入學を許可しない相な學校があると言ふ事を聞いて居るが、教育者と言ふものゝ内にも女學校や師範學校の先生方程に困つた奴はないものである。麗しい蓮も泥の中から生ずるではないか。濁りにしゆまぬ白蓮の美を賞する者は其の泥を評してはならぬ。美しい白蓮に泥をつけてはならない。教育に國境があるか。藝者屋だの娼妓屋だのと區別はない筈のものである。社會の進歩に最も後れて居る者は中等教員である。かゝる方面の女子には入學を一層歡迎して更に一層理解ある訓練をしてやらなければならぬ。然らずむば遂に情的聚團としての國家を作る事は出來ぬ。

朝日新聞の切り拔きに次の樣な記事が現れた。東京麹町高女を大正九年四月卒業した伊藤志津子（十七才）と言ふ才媛が此の程突然日本橋區上槇町藝者屋奥村方から

「菊華と名乘つてお披露する事となつて居た所が、其の志津子の身邊を圍繞して、學校、同窓生、兩親、親戚などが思ひ思ひの立場から解釋し、遂に東京府の社會局まで顏を出すと言ふ騷ぎである。志津子が藝者になる動機は物質的や家庭的の壓迫によつて餘儀なくされたものでない事は、父が陸軍御用と言ふ立派な看板をかゝげた皮手袋商であり、慶應理財科を出た足を持つて居る事實で以て明である。デハ本人は何故に此の職を志望したか。志津子の口からは第一私は藝者が好きだと言ふ事と第二に社會の此の方面の惡風を革め度いと言ふ事とである。ソコで同窓の若菜會とかの人々が騷ぎ出し、東京府の社會局とかの耳に入つて、同局の校外兒童取締と言ふ係員が活動し遂に父兄及び本人の意志を飜せしめたので大正九年十一月五日披露をする事になつて居た「菊華事」志津子は再び藝者屋から父母の膝下に引取られ而して更に女子大學に入學する事になつたと言ふ。新聞の報ずる所は大體として右の通りであるが、實際セマイ世の中に腸の少さい奴どもの居る事よと驚いた。跡見女學校の卒業生であつた森律子が女優を志願した時同校同窓會では、除名したと言ふ大騷ぎを演じたのは專

實だがコンなお腹の小さい奴どもは論ずるに足らぬ。京都府女子師範學校が文才ある八木菊枝を出して同窓會より除名し府は學資の償還をも命じオマケに免許狀までも取り上げてしまつた。官僚の無理解は今更事新しく書くまでもなき一の定理であるがまことに困つた奴のより合ひである。女學校の教員どもが一體どんな考へで居るんかテンデ教育の大本を知らぬ。ヤレ文學書だとかヤレ藝術だとか言つては恐れて居る樣な事でどうして教育が出來る。今頃にでも尙天才島田清治郎氏の名を知らぬ教育者が澤山に居る。「地上」とは何ぞと言つた風な問題を出して正しく答へ得らるゝ教育者が何人居るか？「出家とその弟子」や「受難者」の書名も御承知ない教育者が八字ヒゲをモヂつてエラバツて居る世の中だからお目出度さ加減は眞におそれ入つたものである。今の教育者は生徒の讀む本は自分も讀んで、之を指導すると言ふ樣な事はしない。新しいものであれば自分は讀まずに只表題に依て動かされ、徒に生徒を壓迫するんだからお目出度い。生徒が胸中の煩悶を訴へて指導を仰ぐ事の出來る樣な教育者――理解ある教育者――が何人居るんだ。ソンな女學校の先生は日本に一人も居ない。ソン

な事でも言はうものなら、女學校の先生、殊にオールドミスの先生達は根性がヒガミ切つて居るから、直ちに叱りつける。何、自分がケナリクなつて來るからだ。年は取るし拾ひ手はなし、性の悶へは日々加はるし、かくして江戸の敵を長崎でやるんだからタマらぬ。ア、困つた人類は女學校の女先生にぞある。

コンな先生達に教養された生徒は眞に不幸である。彼の奈良高師の女生徒の同性愛や、京都華頂女學校の生徒の同性愛を見よ。教育者の可愛想なる騷ぎ方周章て方の馬鹿げた事を。こんな教師に教へてやる。青年心理や、同性愛の研究を今少し深くして置け。書物もホール博士のアドレスセンスやエレンケイの著書位を原本に讀んで置け。少しは眼がさめるだらうよ。Love and Marriage. や、Love and Ethics. などは名ばかりより御承知のないんだらうよ。尙他にもケイの良書はあるから二三言つて置く。Younger Generation. はケイが若き人々の爲に書いたもの、The Renaissance of Motherhood. は女史が母性の復興を書いた名著である。

森律子が跡見女學校の同窓會から除名せられても尙現在自己として生きて名を天下

に走せたのを見て、今では同窓會の方から頭を下げて居るし、會員は律子の成功をうらやましがつて居ると言ふ事だが、何たる馬鹿な教育者や被教育者よ。問題は各地に起つて教育者や被教育者の無知淺識を曝露して居る。あはれむべきの教育界よ。

所は東京御茶水女子高等師範學校である。時は大正九年十一月二十九日の夜である。創立祝賀會の開かれた夜の事である。寄宿舍の生徒が忠兵衞と梅川の道行きを演じて教育界の問題が起つた。新聞の報ずる所は左の如くである。

「青春の男女達がいかにも胸を躍らす樣な近松の曾根崎心中、金よりも大切な忠兵衞が梅川をつれて道行をするあの艶つぽい新口村、此のシーンをだし物にして、振りの袖、紅い蹴出しに扮裝して女生徒自ら三味線さへ引き人目の關を引かれ行くあの唄文句に所作事を見せた。」

之が其の當時の新聞の切りぬきである。ソシてそれを以て其の日招待された人は教育界の墮落と稱し、校長は舍監に訓誡を與へた相だ。アマリに藝術を馬鹿にして居る。ピアノは良いが三味線はよくないのか。マンドリンやセロやバイオリンなんかを引い

て居ると良いが三味は良くないとの理論が成立するか。近い將來に於ては藝者もピアノやバイオリン位は引かなくては商賣が出來なくなると思ふが、スルト又教育者は周章て出すだらう。藝者はピアノ、バイオリンを使用すべからずと言つた樣な規則を作る必要が起つて來よう。心中物を撰んで惡いと言ふ事はない。一の客觀的表現である。高等師範の女生徒と言はゞ梅川の如く道行も出來るだらうよ、ケレ共ソンな實行をする樣な馬鹿な生徒は居ない筈だ。藝術のシーンとして持つて來たと言ふ事に何の缺點もない。

抑藝術（モヽ〜アート）てふものはどんなものか教育者にわかつて居るんだらうか。藝術の本質がわからぬからすぐ騷ぎ出してしまふんだ。先に引いた女學生が藝者になる問題や、梅川の道行なんかは私は問題にする程の事ではないと思ふ。ケレ共教育界では之が問題なんだから御目出度いではないか。例へば外國物なんかをだし物にしたら何ともないんだ。所で外國物を何とも言はないで日本物を騷ぐんだから言語道斷なものだ。

私はかゝる教員の無自覺淺識よりして兒童生徒を殺して居る事の具體的實例をあま

り多く知りすぎて居る。カラして馬鹿らしくなつて來て物が言へないが今一つ此所に引例する事とする。ソレは試に無鐵砲な女學校長の教育ぶりである。實際今の女子教育界にはこんな人足が澤山居て官僚に阿諛して居るが爲少しも教育の進歩なんか言ふ事はない。鐵窓裡で罪人扱にして生徒を殺して居るんだ。

京都府立第一高等女學校――と明に名を指し示して置く事とする。ソコに四年生のH と言ふ女生徒があつて、東京玄文社出版の「新家庭」てふ雜誌に母校の噂を投書せるにより、筆者Hは勿論、投書を見知りながら之を差し止めざりしと言ふ故を以て、親友なる他の三名と共に無期停學に處せられた事件である。當時朝日新聞や讀賣新聞にも少々出た樣に思ふが、其後停學はゆるされて三名は母校に歸る事が出來た。何でもない。女學校の校長てなものは府會議員や知事にはペコペコなんだから、官僚式の人足は又官僚の方からもち行けば頭を下げて來るものである。私はかゝる手段に依つたのか否かは知らないが、要するに私が校名と校長名を此處に明白に書く所以は、彼等は教育の敵であるからである。私等初等教育者が一生懸命に血汐を流して國家教育

眞の自由敎育、人間の眞正なる義務を果さうと思つて居るのに、彼等校長輩は只之れ官僚式に敎育を愚弄して居るからだ。私等は官僚や知事位を恐れる者でない。眞理と敎育の爲なら生命をも捨てゝかゝる位な熱を以て居る。然るに彼等は生徒兒童を以て奴隷視し、臣僚扈從視し、何の深き考察もなく敎育てふ眞に神聖なる國家的事業、人間的義務を馬鹿にしてかゝつて居るんだ。私は怒るよりも、輕佻浮薄淺識無節操なる彼等校長輩の弱點を歷々と曝露したものとして、寧ろ憫笑すべきであると思ふ。

私は今「新家庭」登載の文面から研究し、敎育界から、かゝる老朽事にたへざる骨董品を葬り去らなければならぬと思ふ。大正八年十二月「新家庭」第四卷第十二號、百十五頁上方女學校通信の欄に曰く。（今全文をかゝぐ）

京都府立第一高女、H

青いノートより

「何が苦しいと言つたつて幾何程苦しくて厭な物はない。之は私達の口から一齊にもれる一定不變な、幾何に對する定義とも言ふべき言葉なのです。

A先生は素晴らしい頭の好い先生、「否應は無いでせう皆樣。」目鏡越しにキラリッと

光る御瞳のおそろしい。廿五分間に問題四題、ソノ又問題の皮肉つてる事と、點の辛い事とは天下一品なのです。

D先生の時間は私達に取つては最も有難い物の一つです。エックリ、ネッチャリした御話に、遂にタゴール氣取りであまり思索に耽つた爲大變なお目玉をいたゞいた方が或るクラスにありましたとか。氣樂な時間はK先生の時間です。私達は此の先生にイビッと言ふ素敵なニックネームを奉りました。か細い今にも消え入り相な聲で「霞は霞んで居るから霞、モヤはモヤモヤして居るからだ。」と言つた風な至極明瞭な御講義が初まりますとノートを引きさく音がアチコチに聞えて樣々な警句が机の上を飛んだり行つたり致します。

フラスコとブンジェン燈の前に克明に試べていらつしやる化學のC先生、ソレは本當にいゝ先生なのです。柄にない好いお聲で獨唱しながら廊下を御歩きになるのが先生の御クセ、テニスが素敵にうまくつて、魔球を御飛ばしになるスタイルの妙さ同じ化學のY先生は何ともなしにチャームのある先生です。研究室で御二人が試驗

管なぞいぢつていらつしやるのをよく目擊致します。か樣な事には特に忠實な私達は此の御室を御別莊と命名致しました。學校創立以來古今未曾有のさはがれ方をなすつたのはS先生でした。今は遙に遠い東の空を望んで御慕ひする幾多の乙女子を如何に思召していらつしやいますか……この次に又。（終）

私は根氣よく此の文面を全部此所に登載して讀者の判斷にあづかり度いと思ふ。私は大石と言ふ校長とこそは未だ一面識もないが同鄕であるけれども、之等三名の生徒については少しも關係はない。私は敎育上よくない事だと思ふから此所に生徒の灯燈を持つて置く迄の事だ。私が之等生徒と同等かの關係がある爲に書く樣に思はれると困るから一寸斷つて置く。

由來京都市の敎育はダメである。殊に第一高等女學校ときては既に前世紀の遺物である。私は先年も二三の知識階級の方々から自己の子女を入學せしむるには何れの女學校が良いでせうと問はれた。私は第一女學校が一番ダメですと答へた。スルと之等の父兄は皆等しく同志社へ入れた。先づ良いでせうとお茶を濁して置いた。父兄は皆

大學や高等程度の學校の敎授達である。私は京都の中等學校長を言つた連中には官僚式が多いと思ふ。敎育の根本問題に立ち至つては無主義無方針である。只自己一人の位置にのみ齷齪して居て眞の大精神に觸れて居ない。某中等學校長の如きは自己の部下を二人までも視學に祭り込んで知事の御氣嫌を取つたり、某校長の如きは某新聞を利用して、新聞政策をやるより何等實力の擧らぬ向もある。今回の停學處分――新聞には停學でないと校長は言つて居るが事實は停學でないか――の如きは眞の敎育者、殊に校長なるものゝ人格を疑はしめる。

私は今少し深く此の問題を極めたいと思ふ。大阪朝日新聞の報ずる所に依れば大石校長の談として、

今回の事について學校の仕打が過酷だと言つて同級生が何事か協議して居るとは驚きました。事件其ものが大した事ではありませぬが、兎に角職員の噂が雜誌に載るやうでは困ると職員一同を集めて戒飭を與へました、其後生徒にも一應將來を戒めて置く必要があると考へ取り敢ず一時父兄預けとしたのです、それも卒業期を前に

ひかへた大切な時期でありますから、極めて秘密に父兄に來ていたゞいて本人が悔悟すれば早速登校させる旨を内示して預けたので決して停學などゝ言ふ意味ではありませぬ。私は本人等の將來を思つて居るのに同級生が騒ぎ立てるとは所謂親の心子知らずで甚だ心苦しい次第です。云々。

ヨクもこんな馬鹿げた辨解的な事が言へたものだ。私は現代の教育界の多くの教員や校長連がこんな事位しか考へて居ないのを反つて悲慘だと思ふ。第一に「事件其物が大した事でないならば、何故に謹慎所分を與へたか。次に「職員の噂が雜誌にのる樣では、」何故に困るのか。噂を雜誌に載せられて困ると言ふからは、事は生徒の罪ではなくて教員の罪である。然るを生徒に停學所分とは罪人がちがつて居る。手足が轉倒して居る。「本人が悔悟すれば早速登校を許す」とは又何とした事なのだ。本人が悔悟したかせぬかを如何にして見分け得るか。尙又悪い事もしないのに悔悟の方法があるか。私は此事件が非教育的な所分を取つたと言ふ事を教育者としても評論家としても悪む。如斯投書を以て不謹慎なりと評する勇氣は我輩にはない。果して彼の投書

は不謹慎なるか？　本人は倫理道德的に悪に對しては悔悟する餘地もあるべきであるとして、私は彼の投書を道德上悪と定義せむ事を躊躇するものである。尙又同級生の一人の言として新聞の報ずる所に依れば「投書の文面には何等の悪意もない噂の撲り書きで誰でも其の投書を見さえしたら、之を過酷極まる處分をする程の者であるかないかは直に分ります。」と言つて居るが、此の生徒の方がたしかにエラいと思ふ。尙又假に一歩をゆづつて本人は不謹慎としても之を見て止めざりしと言ふ親友三名までも停學とは何事であるか。生ける生徒を以て土偶の如く、鑛物の標本の如く取り扱つて居る者は大石と言ふ校長だ。之を見ても同校が如何に自覺なき專政的、十九世紀的教育をやつて居るかゞわかると思ふ。罪は生徒に非ずして校長や職員にあると思ふ。停學處分を以て能事終れりとするならば教育は易々たるものである。

私は一言校長に注意したい。若し不謹慎なりとすれば何故に訓戒を父兄に依頼せずして、血あり熱ある同情を以て校長自ら其の訓戒に當らざるか。「一應將來を戒めて置く必要がある」ならば父兄に渡すてふ事ヨリ以上校長自ら責任を全うして自己が

自己で訓戒し尙校長の宅に引き取りても可なるべし。此の投書が校内職員の噂なりとすれば其の罪は反て職員中にある。私はコンな親切を以て居る校長でなかつた事を遺憾に思ふと同時に、天下の教育者は一人にてもかゝる似而非教育者を道德上に葬り去らなければ大日本帝國の大教育方針は白蟻が建築物を食つて行く樣に、吾人の大精神にきづつける者であると信ずる。現代の教育は女大學の教育ではない。エレンケイの教育の如く徹底しない迄も、今少し教育者に開化的—文化的—知識を持つて居てほしい。ソシて臺灣あたりの教育と同じ樣に京都の大宮人の子女を教育してくれては困る。

私は一小女學校の校長輩と喧嘩して快哉を叫ぶ程に小ではない。カラして初めから教育眼なき彼等輩を相手にこんな事を書くてふ事がまちがつて居た。がしかし之も一つの教育說として聞いて置いてもらい度い。權利教育の半面には大なる非教育的行爲が行はれて居るてふ事を。私は○○警視の一人が第一高女の近所——御苑と第一高女とは相接近して向ひ合つて居る——を巡視して居た際に、ケシかる場所に於て同校男

教員と同校女生徒のケシかる振舞を發見したてふ事を警視から聞いた。又そんな事は度々ある由だ。第一高女は表面大變に嚴格な學校の樣であるが又一面かゝる事も行はれて居る。私は生徒よりも教員に罪があると思ふ。警視は一方は中等教員であり一方は同校女生徒である。カラして事を荒立てず、教育界の爲に穩便に取扱つてすませたと言つて居た。何でもない撲り書きの投書位な問題でない事を校長に注意して置くあまり無暴無自覺な教育の半面には常にかゝる非教育的な事が行はれて居るのでありソシて私は同校の內情についてもモツト深くモツト詳細に批評する資料と方法——教育說はあるけれども先づ他日に筆を改める。要するに私の此の一項は第一高女の直接の批評だが又一般的の女子教育は大低全國共に右位な程度なんだから、私の批評は一女學校の批評とのみ見てもらい度くはない。私の女子教育論の一部と見てもらい度いのである。

京都の女學校、否女學校のみでは決してないが殊に女子教育は昔の公卿の姫樣を教育して居るのと何等ちがひはない。所が公卿と言つても矢張り人間であるから、桑原

と言ふ様な男も出れば、鎌子の様な夫人も出るんだ。貧乏華族なんかホントに平民よりも極端なのが澤山あるんだ。京都は實に二世紀位は教育が後れて居る。校長の專政的教育なんだ。又女學校と言はゞ只男子と言ふものをおそれて居る事が能だ。「女學校は男子との隔離所なり。」てふデフイニションを下して良いんだ。「女學校の目的は女子を男子より隔離する事なり。」は當らずと雖も遠からずだと思ふ。永久に男子と隔離する事が出來るものならば隔離してしまつたらいゝんだ。京都府立第二高等女學校の同窓會の音樂會が開かれた際私の方へも或る教諭から入場券を送つてくれた。其の文面に「入場者は御婦人に限る。」とある。可愛想な入場券でないか。男女同權や女權擴張や女子の參政權なんかを問題にして居る現代思想のアトスモフイーア中に尙婦人に限る音樂會なんかゞ開かれるんだからたまつたものでない。之も專政主義や現代思想を知らぬ校長やオールドミスの牡丹餅をツクネた様な顏をして居る女教師の仕事なんだ。キマツて居る。私は日本に於ても堂々と女學校中學校連合の大オーゲストラやコーラス團が出來る位でなければダメだと思ふ。音樂なんかは男女合併でなければ眞に

十分な事はないんだ。音樂の事については私は大に論じ度い事が澤山にあるが、實は私は音樂專門だから專門の立場から言ひ度いと思ふが、私はソンな事をクドクドシク本書に書く空白を有しないから別に「藝術教育としての音樂」てふ題下に別書として書き上げたから近く出版の運びになるだらうと思ふが。要するに男子を音樂會に入れないてふ様な事を女學校でやつて居るんだから進歩だなくて教育の退歩である。

男子に限つて音樂會に入場させない様な學校の訓育はまことに疑はしいものである。男子と引き離して教育すれば萬障なしと高をくゝつて居る先生達こそまことにおめで度い極みである。先生が如何に引き離さうと思つても引き離す事は出來ない。「見るな」と言ふ物は見度くなり、「讀むな」と言ふものは讀み度くなる。「スルな」と言ふ事はして見たくなるてふ事は人の本性である。牛山の風景も嘗ては美しかつたのだ。その美しくない所以は斧鉞之を切つたが爲である。其の美ならざるは豈牛山の本性ならむや。私はかゝる淺き考を以て行はれて居る女學校の半面は疑はしいものだと思つて居る。澤山此所に擧げるべき例はあるが一つを持ち出して見よう。

京都四條の大通から富小路を南へ少し入つた所から日々府立第二高等女學校へかひがひしく通學して居た女學生があつた。純白な皮膚は絹布の樣に光つて、クッキリとした鼻、涼し相な瞳、フックリと肉張つた中肉中脊の彼女は天稟の美を備へて居た。そして一種不可思議の力は常に男をチャームする魅力を以て居た。彼は常に文學を好んだ。學校で禁止されて居る樣なモヲパッサンやダヌンチヲの死の勝利などを愛讀した。愛と性とが眼醒めて來るに從つて如何に彼等若き者どもに最も不適當な教育がのろはれて來た。學校は人を殺す場所である。若き者の共鳴する樣な教育は何等施されない。ア、學校はダメだと思つた。彼女は日々四條から西行の電車に乘つた。車庫を通つて北へ進めば二條離宮の西方に宛然たる京都監獄がある。其前方は日々彼女の通學して居た第二高等女學校である。京都監獄には澤山の囚人が日々法律の網にかゝつてつながれて居るに對し、前方高等女學校では若き小女を鐵窓裡に呻吟させて居る。

よいコントラストではないか。コンクリートでつみ上げられた高壁の上にはガラスまで並べられた城郭中には、權利と規則で壓へつけられた幾百の女學生が體のよい監

獄につながれて、あはれや思想戀しと呻吟して居る。彼女はダンヌチオやモーパッサンなどを風呂敷づゝみにしのばせては毎日此の體のよい監獄に通學して居た。

大正十年春尙淺き〻の内、十一日午後二時、日誌の一部に、「自分は悲觀の極、モルヒネ自殺を致します。今オブラードで包んだモルヒネを呑んで……。」と書きしたゝめたみづくきのあとも細く、小さき胸に手をあてゝ此の世を去つた彼女の半生には、自覺なき學校教育の罪、教育眼なき教師の罪、其他の舊道德の罪に依つて、學校は生徒を殺す場所なりてふ眞の定義がありありと讀まれて實に心ある者の身に寒汗せしむるものがあるのだ。嗚呼罪深き現今の女子教育よ、教師よ。

當時の大阪朝日は此の事件について次の如く傳へた。十九才を一期に自殺を圖つた四條富小路〇〇〇〇の妹つや子の葬式は十二日茶毘に附し十三日黑谷で葬式が行はれた。同家は京都に於ける舊家である。百三十年も前から人形屋として京都に其の名を誇つた家柄である。然るに十三日艶子の葬式には參列した人が頗る少なかつた。「これが普通の病死でゞもあるのなら……不義の自殺では葬式の淋しいのも尤もですよ。」

と私語く人もあつた。警察では「自棄的自殺であつて情夫のある事を家人にさとられ外聞を恥ぢたのであると言ふ理由に依つて檢死も極めて簡單に濟んだ。無論情夫のあつた事も明であるし、艶子が救世軍の女兵士として、眞向ひの救世軍京都小隊で、神へ奉仕の淨い活動を試むる間に某大學生と關係をつけた事は家人も覺えて居るが、一方では情夫は唯一人ではない、四五人もあるらしいと傳へられて居る。彼女は女兵士として忠實に働いた。路傍で健氣な說敎をして居る事もあつた。神の愛を說いた博愛主義を標榜した彼女は性慾的にも博愛主義を振り撒いて、クリストの名にかくれた多くの不良分子と交際した。第二高等女學校へ通學する四條千本線の往復の電車の取り持つ戀もあつた。大學生あり中學生あり。早くから彼女の名にたがはぬ艶名は不良學生間に知られて居た。生徒間では彼女を呼ぶにクインの名を冠して居た。自宅附近の人々も「富小路小町」とか「人形小町」とか言つた程であつた。斯くまでに彼女は美人であつた。平素から彼女のダイアレーには死を謳歌し讃美する文字が記されて居た。名門に生れ何一つ不自由なき生活をなしながら遂に彼女は異性の香に醉つた。祖

先を忘れ家柄を忘れ不義の自殺をなすに至つた彼女の知るに由なき原因はお腹が證明した。尙目立つてふ程の事もなかつたが不良少青年學生等の胤を宿した事は事實であつた。情夫のある事と姙娠した事とソレが判明し出した事とは彼女の小さき胸をいためた。「自殺」！彼の心には既に死より方法はなかつた。大正十年一月十一日尙市街にはゞ繩が寒風にソヨいで居る午後の二時。彼女はオブラードに包んだモルヒネを口に入れてしまつたのであつた。

私は嘗て日記に次の樣な歌を書きつけた事があつた。ソレは私の知つて居る女性が――娘が――右の樣な同じ徑路を取つてしまつた時である。「人の胤やどして死ぬと言ふ程にあはれな事の他にもありや。」死は絕對である。死は美しいものだ、淨いものだ。しかし艶子の死ほどにあはれにもいさましきは少ないのである。あはれ十九才の春尙淺き東山黑谷の奥には香の煙もあはれに立ちのぼる事であらう。敎育はかくして若き人々の心を殺して行くのである。

近來女學生の自殺が大變に增加して來た樣であるが、ソレは若き彼等には自覺が出

來て來た證據である。自殺は由來文明人に多く野蠻人に少なく、男に多く女に少なかつたものである。然るに近來此の女學生の自殺が新聞に傳へらるゝ事の多いのは一面女子の進歩と見ても良いが、半面には女子教育の不覺をあらはして居る。女學校で四年か五年の間「男子との隔離所」として教育した罪が彼等の無暴なる自殺や情死をまねく事になつて來たのだ。性の教育もせず、男子と隔離してしまつた女人島の如き女子教育が將來の帝國の國民教育を誤つて居るのである。實に現今女子教育者は我帝國の眞の敵である。國賊である。私は「女子教育」や「文學と教育」さては婦人問題などについても隨分に意見を以て居るが、之は他日筆を更めて書く事とする。とにかく男子禁制の音樂會を開く學校の半面には如斯女學生も出るのである。

一〇　私は如斯女性を教養してもらひ度い

私は女性と言ふものに就て隨分に考へさゝれた事がある。實際に私は女性の教育についても深い考察をした。しかし私は此の事について別に筆を更めて書いて居るから

近い内には出版の運に至るだらうと思ふが、詳細な事はソレにゆづゝて置く事とする。

私は現今の女子問題は要するに道德問題だと思ふ。故に古い頭の、舊道德の所有者ツマリ儒教と佛教のこんがらがつた德川時代の非論理な婦人問題、貞操觀を所有して居るカビの生えた人々どもが死んでしまはなくちや何の改まる所もないんだ。

現在の女子教育は男子との隔離所だと私は先に幾回となく反復した。此の不眞面極まる教育界に唯一つの花がある。唯今私の書齋へ女中が特つて來た新聞を見ると、神戸女學院と關西學院とが共同して大演說會を開いて居る。實際かうならんければいかん。男子禁制の音樂會を開いたり、高塀で以て取りまいた城の樣な體のよい監獄の中に囚人あつかひにしたりして居る樣な女子教育者の手本とすべきだ。

良妻賢母と言ふものを養成するのはドンなものが果して良妻賢母かと言ふ事を知つて居る人でなければならない。私は妻としては夫の心に共鳴し共感して心も身も共に夫になげ込んだ樣な女でなければ良妻とは言ひ得ないと思ふ。夫の爲ならば身も世も忘れて火中にでも飛び込む樣な女、ソレが眞の妻である。妻がかくあれば夫もかくあ

るべきである。私は先日新聞で佐藤謙三氏が洋行する記事を讀んだ。私は氏が洋行する旅費を得る爲に各所で幾回となく音樂會を開いて居るのを知つて居る。私も二三度ソノ音樂會に行つて親しく氏の大藝術に接した。メンデルスゾンの競奏曲作品第六十四中のアンダンテ及びアレグロ、モルトヴィヴァーツェなんかを氏がバイオリンのソロを以て演ぜられたなどは一番ソノ技術に感心してしまつた。又節子夫人が夫を助けてピアノ伴奏などを演ぜらるゝ所、私はよく婦人として夫に共鳴されつゝある所を感じた。私の感じたのは、私の最も感じたのは尙他にある。氏がかくまでに氏の藝術的抱負を演出して居らるゝにかゝはらず幸か不幸か頗る人々の入場が少なくて、氏の洋行の旅費すら滿たし得ないと言ふ事である。日本人、殊に金持の連中が藝者と言ふ安價な藝術を賞して彼等に大金を投じて居て、高尙なる天才的藝術家には何等援助する頭を有しない事はまことに困つたものであるが、ソレは兎に角として佐藤氏は千幾百圓かの洋行の旅費すら得る事が出來ず。未だソノ半に滿たぬに出發してしまつた。ソノ時佐藤氏は新聞記者に語つて曰く。「若し食ふ事が出來なければ勞働してゞもバリー

の市街に音樂を研究します。旅費は先方に行くだけありませぬが上海で音樂會を開いてソノ一部を補ひます。」其時夫人の言として傳へられた所は「私は尙夫と共に洋行するだけの旅費が出來ませぬ。兎に角バリーまでドーなり行けさへすれば良ろしい。私は先方で食ふに困れば下女でも致します。ソシて夫を助け自分も音樂を研究して見度いと思ひます。」旅費を滿さずして洋行する二人の若き音樂家には同情せざるを得ぬが更に夫人が此の危險を冒してでも夫の爲に盡し、下女となつても夫の爲、道の爲に盡すてふ心事を讀者は何と思ひ給ふか。私は此の夫人を持ちてこそ佐藤氏はたしかに大成功する事疑ひなしと信ずる。昔から偉大なる人物の後には偉大なる婦人が蔭れて居る事を知つて居る。鈴木三重吉氏の夫人が夫に對して盡さるゝ細密なる注意などは私は或る人から問いたが、アレだけの文才を以て名を成した氏の後には、夕立の雨水の音が急なるを板戸を以てさけ、夫の思索の散漫せざる樣注意された夫人の功績がアリアリと見える。サテこそ氏の名を偉大ならしめたのである。北原白秋氏がアレだけの名を出したのも直ちに其の後に夫人の力の少なからざるものある事を思ひうかべる事

が出來る。夫の思想と一致せずとて同棲を退りぞけて去つた氏の夫人はたしかに私は賢婦であると思ふ。思想の合致せざる者が同棲するてふ事は罪惡である。夫人が其の夫の天分を全からしむべく自ら去つたてふ事はたしかに自ら夫の爲に火中に飛び込んだものである。私はかゝる婦人の偉大なる力を聞く度びに總身に血がわき出る樣にうれしい感がする。

私は夫の爲に心身共に夫の心にトロケ込む樣な熱烈なる愛と同情を以た婦人を要求する。夫の仕事に共鳴して水火をも辭せざる體の婦人を要求する。自分のヘソクリを貯へて置いて美しい着物を着たがつたり、學士や博士の肩書にカブレて虛榮の夢を見たりする樣な女子は大變に嫌である。所が現今の女子敎育はソンな夢を見る樣な敎育のみしかしないんだ。私はイツも感心して居る事がある。京都で一番にぎやかな京極の最中に寒風身を切る冬の夜も、熱鬧の夏のまひるも、相も變らずアハレな聲を振り出して——叫んで——新聞を賣つて居る片目の女がある。背には一人の子供を負ひ尙小さな子供は下で遊ばせてはアハレな聲で叫んで居る。自働車にのせられて人形の樣

に可愛がられながら虛榮の夢に醉つて居る女子と比較する時、一枚五錢の新聞を賣つて五厘の口錢で夫の爲子供の爲に、アハレや悲しき生活に糊口をつなげる彼新聞賣の方がはるかにエライと思ふ。私は無學でも良いから彼の新聞賣の樣な妻がほしいといつも思ふ。貧富は運命である。如何ともする事は出來ない。唯如何に貧しくても、如何に糊口に窮するとも、全身を、全生命を夫の爲にさゝげてくれる妻がほしいと思ふ。如何に自働車のヘッドライト勇ましく都大路を疾走させてくれる樣な金持の美女があつても私は少しも羨ましうはない。例ヘソレが如何に絕世の美人であつても、理解なき、自覺なき、思想なき女は妻として價値がないからである。

鰺坂國芳氏と言はゞ若き敎育者であればたれ知らぬ者はあるまいと思ふ。鋭利なる筆硯を以て敎育の改造——否とよ道德の改造——を絕叫されつゝある偉大なる敎育者であるが、氏は鰺坂てふ姓ではなかつた。ツマリ養子として緣付かれたのである。所が京大を出で廣島に赴任して以來、自己の思想と主張の根本的樹立より、養家に妻女や子供を置き去りて、私立女學校の英語敎師なる現在の夫人と共鳴し同棲し、其の東

京に赴任出發せむとするや、舊妻女子供の見送りも顧みず新夫人と手を取つて勇ましく出發したと言ふ事は、實際舊き道德から見れば大なる悲難の的となるものであらう。私は共鳴なき婦人と同棲して居る事程に大なる罪惡はないと思ふ。若し舊婦人にソレだけの自覺があらば悅んで送つたにちがひないと思ふ。私は偉大なる共鳴者現夫人を得られた事を氏の爲に祝すると共に、夫と共鳴せざる爲に――夫の爲に――去つた白秋氏夫人と共に、廣島驛に夫を送つた鰺坂氏夫人も賢いと思ふ。

私は此所迄書いて來て私の持つて居る萬年ペンが折れさうになつて來た。私の腕がぬけさうになつて來た。書肆に急がれて書いた事は書いたが書く事が澤山あつて筆がドウも運びがおそくなつて來た。今朝から原稿紙三十四五枚書いた。私の考はいつ盡きるともわからぬが腕がダルくなつて來て筆が落ち相だ。しかし今少し書かなければ滿足が出來ない。幸に拙文をも心して御覽をねがひ度いものである。

私は此所に捨てる事の出來ぬ挿話をもつて居る。私は鰺坂氏や北原氏、鈴木氏や佐藤氏の夫人のお話をもち出した。ソシて何れもエライ方だと常々感心して居る。ソシて私もソンなエライ婦人に接したらドンなに私の愚鈍な頭も開發される事だらうと思ふ。私は禿筆を呵して更に次の樣な婦人を讀者に傳へたいと思ふし、更に現今の敎育はコンな婦人を敎養してもらい度いと思ふ。

國際法學の大家、おそらく開祖であらう、グロチウスの名は最近に至つて歐米各國に振動し出した。今迄とても學界に知られて居なかつたのではないが、最近世界多事ならむとするに至つて、各國ともに國際法の研究が急にやかましく言はれ出した。したがつて氏の名は次第に學界に喧傳されて來たのである。氏は西暦一五八三年四月十日のイースターサンデーの夜オランダ國デルフトのグロート家の長男に生れ、其の一生を國際法の研究と實行につとめたる偉大なる學者である。二十四才にして檢事總長の要職に拔擢され、二十五才名家ライゲンスベルゲンの女マリアと結婚した。マリア夫人はたしかにグロチウス以上の賢婦人だと私は思ふ。彼が妻をむかへるについての注文は「如何に生活が變化するとも、如何に失望が我等二人の間に押し來るとも、絶對に貞順と內助を以て夫を扶け得る女。」と言ふ事であつた。グロチウスの名と實とを

かくまで世界的ならしめた原因はたしかに夫人の偉大なる內助の功にあると言ひ得る。私はグロチウスが要求した如きヨリ以上のマリア夫人を天が――はた神が――グロチウスに與へた事は、世界の學界の――はた國際法學の――奇瑞だと信ずる。私は唯今グロチウスの傳記を書かうとは思はぬ。又ソンな目的ではないがグロチウスの夫人については一言せなければならぬ。

當時オランダは內紛がはげしかつた。ソシて政府の背後には騷動を利用して自己の實權を張らんとする野心家が居た。遂にグロチウスは他の二三人と共に逮捕監禁されて、舊敎を導き入れやうとした反逆者てふ罪名のもとに憲法に認めざる特別裁判に附せられ、約九ケ月の未決監に投ぜられ、一六一九年五月十八日、彼は三十六歲にしてレーヴエスタイン城に終身禁獄の身となり財產は沒收されてしまつた。マリア夫人は如何なる心事やしけむとそゝろ同情を禁じ得ないものがある。

此のグロチウスの生死の境にあつて忽ち夫人の偉大なる力はあらはれて來た。實際天才は不運であり、誤解されるものである。グロチウスの一生は不幸と不運の連續で

はあつたが、"Grotius hic Hugo est, Batavum captivus et exul, Legatus Regni, Saecia magna, tui" と刻まれた自撰の墓銘の下に靜にマリア夫人の內助を感謝して居る事であらう。オランダにて追放の囚人グロチウス、其の夫人の働は今少し語らなければならぬ。

マリア夫人は城中に子供と下女とを伴つて日々夫の世話をした。所が嚴重なる條件のもとに生活して行くのであるから、其間に於ける苦痛は實に想像する事が出來ない悲慘なものであつたらうと思はれる。如斯にしてグロチウスは溫き夫人の世話に依り二年の長き間書を讀み筆を取り、囚屋の月をあはれびては月日の流れるのをも苦しとも思はずにすごした。夫人は夫の反對黨なる政府より支給さるゝを心よしとせずして一切拒絕し、生計費の調達はか細き女の腕一つで以てさゝへた。驚くべし此の時に當つて警備の役人の弛みを見てグロチウスの脫獄計畫は夫人の手によりて成されたのである。

グロチウスの友人から借り入れる書物や洗濯物は常にトランクに入れて運ばれた。

城の番兵が此のトランクを一々檢査したのは最初だけであつた。城兵の怠慢に依つて婦人は夫をトランクの中に入れ、アダカモ書物や洗濯物を運び出す樣に用意周到に脫獄せしめた。恰も守備隊長が公用で留守となつた。婦人はグロチウスをトランクに入れ、堅く錠を卸し、番兵を呼んで擔ぎ出させた。番兵は二人がゝりで之を擔ぎ出した。所で夫人は共に出る事は出來ぬ。若し共に出もしようものなら直に脫獄が知れて追手にとらへられてしまふ。所で夫人は夫が病氣だから今日は出られないとて一人城中に殘り、二十歳の下女を附けてやつた。かくてグロチウスはゴルクムの町に到りダーツエレール夫婦の世話で石屋に變裝して翌朝午後オランダ政府の勢力外であつたアントワープに逃げ込んでしまつた。而して其後數日にしてアントワープを去りバリーに落ち附いたのである。

さてバリーに落ち附きたるグロチウスは先づ安全だつたとして夫人マリアは如何なつたであらう。トランクに夫を入れて脫出せしめたはよかつたが、自分は城中に殘つた。此所が偉大なる夫人の膽力である。夫人が共に逃げ落ちたならば直に此の計畫は

露見して追手に捕らへられた居たにちがひない。夫人が殘つてグロチウスの居る樣に見せかけた所に、グロチウスの安全に落ちて行く事が出來たのである。其日一日グロチウスは病氣で床にあると告げてあつたので守備隊長が歸つて來る迄脫獄が露見しなかつた。所で隊長が歸つて來てグロチウスはどうしたと尋ねられて、籠の鳥は飛んでしまひましたと夫人は何等驚く所も恐れる所もなく答へた。隊長は大に周章して直に追手を出したがもう遲かつた。夫人は嚴然として自己一個の計畫で他に連累者はありきせぬと答へた。此の重大な叛逆者を逃した罪は當然夫人にかゝつて來る事は夫人のよく知つて居る所なのだ。又ソレが重大なる罪であり生死をも辭せざる覺悟でなければならぬ事も彼女は知つて居る筈である。夫の爲に平然として死線に立ち嚴然として籠の鳥は飛んでしまひましたと答へた其の言葉は石よりも堅く鐵よりも重く、流石のオランダ政府をして其の夫人の義烈に感動せしめた。政府はやがて夫人の壯烈に感じ放免した。ソコで夫人はバリーに至り夫と一所になる事が出來たのである。グロチウスが國際法論の著述は此の後の出來事である。

私は今グロチウスの傳記について語らうとするものではない。若しグロチウスの傳を知らうとすればソハ澤山に書かれたものもあらう。私はグロチウス夫人マリアの偉大なる事蹟についていつも感極まり涙せき止むる事の出來ない者である。グロチウスの偉且大なる事業の後には心命を夫に捧げたるマリア夫人がある事に注意しなければならぬ。夫人を評する何等の言葉をも私は知らないのを恥づる。實際之れ位な大夫人に對して捧ぐべき賞讃の辭は私にはわからぬのである。唯偉大であると言つて置く。偉大なる夫人よ。御身の名はグロチウスの名と共に永遠に敬慕せられる事であらう。

私は現代の女子敎育家に一言を呈する。男子の隔離所の如く、又は囚人の如くにしたる女學校の寄宿舍からはこんな偉大なる人物は出ないんだと言ふ事と、若し出るてふ場合には金を持つて居り、榮華な生活をして居ながら萬引をする樣な夫人にきまつて居る。ソンな夫人を澤山養成して居るのが現在の女學校である。グロチウスやマリア夫人の如く獄裏につながれた時は、ホントにつながれる樣な事をしてつながれたものばかりだ。男子禁制の音樂會なんかをやる樣な女學校にホントの日本のマリア夫

人は生れないんだ。

一一　無茶苦茶敎育

現今の敎育は主智的だとか形式的だとか言ふ批難がやかましく言はれて居る樣だが私の目から見ると主智的でもなければ形式的でもなく言はゞ無茶苦茶的敎育なんだ。形式的も悪い主智的もよくない。しかし無茶無茶的敎育は更に更によくない。實際我々が敎育上實際を考へて見る場合、果して眞に敎育の出來得る先生が失禮ながら何人居る。眞に敎育の大本を理解し自覺して居る視學殿や官吏が何人居る。眞に我國現今の敎育は困つたものである。

現在の敎育は哲學、社會學の上に立脚しなくては眞に敎育が出來得たとは言ひ得ない。更に必要なのは醫學の智識である。敎育上、哲學や社會學の必要な事は我國に於ても種々論議される樣になつて來た。しかし醫學上の立脚については何等實行もされず論議もされて居ない。時々學校衞生の醫者が徒然なるまゝに、新聞や雜誌に登載す

る位の事である。教育上醫學の知識を捨てゝしまつては人を教育するのでなくて非教育となつてしまふ。私は教育的醫學について論ずるものではないから、又本書がソンな事に極論する必要もないが、私の此所に言つた醫學てふ事は決してせまい意味ではない。尚又現今の醫學では頗る物足らぬ。現今の醫學は或る一部分をのけて他はその大部分が解剖學に他ならぬ。私の教育學的に要求する醫學は唯に身體の形式的解剖に止まらずして、精神の心理的研究が加はつて居なければならぬ。精神病學の方が專門の醫者は別として、他の多くの醫者てふ醫者は精神學を知らぬ。デ假令へば病人に接しても其の形式的身體的の方面しか治療の方法を與へない。コンな醫者では教育醫としてはダメである。教育醫のみならず、醫者として價値がない。醫學の智識がなくては教育は不可能なのである。年に二回や三回學校を見て廻る位な現行の學校醫なんかはなくても事がすむんだ。植物を仕立てるに植木屋が必要だ。植木は植木屋に限る。兒童てふ草木を仕立て上げるには教育上の植木屋がいる。ツマリ教育醫が必要になつて來るんだ。ソコで眞の教育者は哲學社會學の他に醫學の必要は火を見るより明な

事だ。所で我大日本帝國廣しと雖も醫學の達者な教育者が何人居る。淋しいどころでない。皆目ないんだから困つてしまふ。師範學校の教科の中にも倫理や論理はある。教育學心理學もある。オマケに教育史や教授法と言つた樣なものまである。所で大切な社會學や醫學はない。教育が出來る樣な先生を養成する事が不可能である。或は師範教育が僅に四年だからソンな議論は無理だと言ふ人があらう。ソレは御もつともな事である。實際現代の師範學校なんかは教育的に見て頗る價値のないものになつて居る。私は各府縣の師範學校に各々高等師範を附設してモツトモツト眞の研究者、理解ある教育者を作らんければならぬと思ふ。ソレには困つた事には先生がない。ツマリ我國の教育界は教育者が足らぬと言ふ事になる。我國の教育は小學校の先生達よりも中等學校の先生達の方が不勉強で不熱心である。小學校では至る所で研究會も開かれお互に參觀もしあつてナカナカ勉強もして居る。所が中等學校では參觀人なんか言ふものがあるか。殆んど小學校と比較にならないものである。之を以てみても中等教員の不熱心がわかる。師範學校や高等師範さては中學校女學校等の教育は實に馬鹿げ切

つた事ばかりやつて居るではないか。一寸談が脱線し出したが、私は常に左樣な事を考へて居るものだからツイ口に出て來る。唯現今の教育は右の根本問題、ツマリ哲學的社會學的醫學的の立脚がなくては眞の教育は出來ないと言ふ事は今更事新しく論議する必要はない。ソシてソレ等の根本的立脚が現今何等考へられないで實行されて居るんだから、私は現行教育を主智的でもなければ形式的でもなく言はゞ無茶苦茶教育なんだと思ふ。或事がらについて教育的判斷を下さうと言ふ場合に、哲學社會學醫學の智識が教育者にない場合には決して正當なる價値判定を下す事が出來ぬ。所で現在哲學や、是等の根本的研究の出來て居る教育者が殆んどないとしてみると心細い事である。教育上の種々の問題を無茶苦茶にやつてのけると言ふ事になる。實際上無茶苦茶にやつてのけて居るんだからタマらぬ。體操だ運動だと氣狂ひの樣になつて叫んで居る教育者が隨分に澤山にあるが、サテ體操の教育的目的はと問ふたならば教則位な所へ歸結してしまふ。ツマリ醫學の根本的立脚てふものがないからだ。教育的の體操は醫學上の根本的立脚でなければ教育的價値はない。彼のフエリエンコロニーの如き

は全く醫學的の立脚を脱しては絶對に價値のないものになつてしまふ。近時各地に體操熱が起つて、男も女も運動し出して事は良い事だが、一方には寒風に冬木立が立つて居る樣に、枯れかゝつた女教師が外國人の乳母とも下女ともつかぬ改良服とかを御召になつて飛び上つて居るのを見ると何とも言ひ得ぬ御氣の毒さがムラムラと胸に起つて來る。ソンな女教師が官僚から表彰されるんだからたまらぬ。アレで御自身では大變な御滿足とやらに拜聞するが、我々の眼から見ると實際に悲慘である。或る學校に體操の講習が開かれた。其際に女子は改良服に靴を穿けとの先生からの命令だつたとて或る女教師なんかは大急ぎで靴を注文するやら服を作るやら。スラリと背の高いソシて鼻のツンとした金髪の西洋婦人にこそ洋服は最もよく似合ふんだ。日本人の女アノ背の低い、ソシて良く太つた、足のみぢかい、牛とも豚ともわからぬ、横にころがした方が早くころげる樣な、シカも鼻はひくゝて面の樣な顏をした日本の女子が、西洋服とも支那服ともわからぬ、改良服となん言ふものを御着になつた時のザマつたら。私も大分に開けて居るつもりだが、アレだけはマダ開けては居ません。

此の頃各地の女學校でも改良服てふものを一定に着せて居る。人間を道具にしたものだ。日本の女子はシリが大きくて不細工さつたらなつて居ない。ソノ大きなオシリの持主が洋服だと、開た口がふさがらぬ。アレ程迄に日本の敎育者は人間の子供を道具視するんだ。工場に働く幾萬の女工に一定の服を着せると言ふ事と意味がちがふ。工女と言ふものは一定の機械として動くんだ。何も自然の天賦にまかせて敎育する樣な事とはマルキリちがふんだ。或る女學校では袴にマチをつけて居る。其の理由に曰くが振つてる。男に弄られぬ樣にだと。面白さも可笑しさも何とも言ひ得ぬ。ソンな事まで心配して居る女學校の先生達よ。自分の袴には鐵のマチでも着けて置く必要はないかい。

改良服てふものに一定した學校は人の心までも一定出來ると思つて居るんだ。形式的に服をソロへて見て滿足して居る方々こそ可愛想でならぬ。昔の師範學校つたらソレは軍隊式だつたのだ。今の軍隊の如き形式訓練は舊時代の遺物である。ソンな骨董的訓練を今の文化の時代に持ち出してドンな敎育が出來るんだ。女學校や中等學校の

先生達は皆日本字で書いた書物でなければお解りにならぬ。少し西洋人のエライ人々の書いた本を讀んで少しはカシコクなつてほしいものだ。ソシテモ少し開けてから人の大事な子供を敎育してほしいものだ。今はチョンマゲの時代と少しちがふがね。

大體人によつて服にも適不適がある。美的標準を別としても大に考察すべき性質のものなんだ。ソレもかまはず女學生に一定の服をきせて悦に入つてるんだ。何たる馬鹿な敎育者よ。殊に女子には美と言ふ大なる責任のあるものである。ソノ美ソノ愛を除去して女子の價値は半減するんだ。しかし袴にマチをつけて穿かせて居る女學校の先生方にはさもふさはしい考かも知れない。

話はちと横の方へソレて來た樣だが、一體小學校や中等學校なんかは根本的に敎員殊に、校長の頭を改良しなければだめだ。近頃敎育哲學てふ事がチョイチョイ言はれる樣になつて來たが、デウイー敎授の著書を譯した位の所で何等の研究もされて居ない。所で敎育社會學だの敎育醫學だのを數へあげると殆んどないんだから困る。何所の學校の書架を見ても醫學や社會學や哲學の本なんかテンデ見當らないんだ。日本藥

局法すらないんだ。哲學辭書つたて同文館出版のもの位だ。アイスレルやベールの哲學辭書位はあつても良かり想なものだ。假令同文館の哲學辭書でも良い。無いよりもある方が餘程ましだ。ケレ共同文館の辭書ですら見てない。見てない筈だ。哲學辭書を見て解る樣な人は一人も居ない。メードインジャパンの哲學辭書すら見る人がない。まして歐米の哲學辭書と來ては殆んど其の名さへ御承知でないんだから呆れてしまふ。曾て或る小學校でインジャンペーパーに刷られたブリタニカを購入せよと私がすゝめた事があつた。所で職員や校長から一笑に附せられてしまつたんだ。別に不思議な事はないと私も可愛想になつてきたから二度とすゝめはしなかつた。セメて日本製の哲學辭書位は解る樣にして置いてほしいものだ。

エライ氣焔が他の方へ飛んで行つてしまつた樣だが私は言はうとする事が隨分に澤山あつて實は系統的に所分する事が出來なくなつて來たのだから今少し辛棒して讀んでもらひ度い。其內にはまとまつて來るだらうと思ふ。却說、話は再び前に立ちもどる。實際現今の敎育者の敎授なんかは無茶苦茶なんだから其の子供に及ぼす影響も惡

くなつてしまつて遂に大事な人間の實を殺してしまふ事になる。實際敎育者自身、死んで居るんか生きて居るんかテンデわからぬ。多分死んで居るんだとおもふが又は蛇のなま殺しの樣であるか。ソレでは敎育も出來る氣づかひなしだ。嗚呼敎育は困つたものなんだ。

小中學校や女學校の職員室と言つたら骨と皮とで作つたマーブル製の樣につめたくなつた先生と言ふ機械が暴君の樣な校長の繰り人形の樣にして廻轉して居る。私は眞にお氣の毒と言ふよりも實際悲慘だと思ふ。ストーンヘッドをもち廻して敎案とか言ふものをお書きになる。ソコへ視學と言ふ昔の目附役の樣なおそろしいものが廻つて來る。ドーも今の敎育制度はよく出來たものだと感心する他はない。

一二　盲を開けモツと大事を考へよ

「ヤア、どウも電話で呼びつけて失敬した、實は今日是非とも君に話し度い事があるので急に給仕に電話をかけさせたのだつた。所が君は日直だと言ふ事であつたがよく

來てくれた。」

「イヤどうしまして、所で僕も實は是非合はなければならぬとは思つて居たんだつたが、先日も君から電話をかけてもらつた時にもと思つたが大した雨で失敬してしまつたんだよ。」

「ソレは丁度い丶事だ、マアあたりたまへ、今日は大した雪だ。」

「ヤア有難う。」

「デ今日の話と言ふのは例の件なんだがね。大體君はSさんに何て言つたんだ。」

「何つて別に何とまとまつた事は言はなかつたが、大體あの女教師は僕が最初の學校で同輩だつたし、今度僕の學校へ取る時も校長にたのまれて交渉に行つて來たのだ、で僕は責任上言つたまでさ。」

「ダガ僕の名を出したと言ふんだないか。君が。」

「ソレは出した。ケレ共君と彼女との關係がおかしいと言ふ風評なんだから出したが僕としては君だけとはちがつて一般的に言つたのさ。」

「デモ君は僕と彼女との關係はドウだとか、僕をドウ思ふとかて言つた相だないか。」

「ウン言つた、ケレ共。」

「先づまち給へ。君は一般的に注意したと言ふが、しかし僕の事についてだけしか聞かなかつたと言ふではないか。デ僕の事をドウ思つて居るかと言ふ事と、僕との關係はドウだとの二つを聞いて、ひどく注意した相だね。」

「ソレは注意した、ケレ共僕には先にも言ふ通り先に居た學校での同職同輩であり、今度も其の理由で世話とは言へぬが責任があるからね。デモ君には關係がないよ。」

「關係がない事はない。大した關係がある。」

「何、君に關係がある樣な事は僕は斷じて言はない。」

「ケレ共僕を、少なくとも君が僕の名を出した事は事實だないか。」

「ソレは出した。しかしソレは君の事との關係上出したので、僕は彼の女教師の注意として彼女へのみ言つたのだから、君に對して何等一言も挑戰的な事は言つて居ないんだ。只彼女の爲、彼女の將來の爲、彼女だけに注意したまでゝ何等君に對して、

又は君の事なんぞを言つた事實は更にない。」

「デハお尋ねするが僕が彼女との關係上とは一體どう言ふ事なんだ。」

「ソレは風評にある樣に君と彼女との關係さ。」

「關係と言ふと。」

「ソレは何かあやしい樣だとのさ。」

「ドウあやしんだ。」

「何だか君が音樂教室でピアノを彈いて居たら、彼女も其所へ入つて行つた、一時間ほどして教室を出て來た時に彼女は赤い顏をして居たと言ふ樣な風評さ。」

「ソレがあやしかつたり、おかしかつたりするのか。」

「ソレは主觀と言ふものだからね。」

「君は大體人を馬鹿にしてる。ソンな風評や君の主觀で僕の名を出したのだね。デは君に問ふが、デ僕が何か肉的の關係でもあつたと言ふのか。」

「ソンな事は知らぬ。僕は僕の學校へ出入りをする大變に常々正直なおとなしい男がさう言つたし又校長にも告げた相な。カラしておかしいと思つたんだ。」

「デハ、ドウおかしいんだ。」

「ソノ樣におかしいと言ふんだ。」

「ドノ樣に。」

「ドノつて風評にある樣にさ。」

「風評はどうでもよい。僕は君に聞くまでさ、風評てなものは人の耳や口には戸が立てられぬから致し方がないとして少くとも同輩として君と酒ものみ歌も詠つた間からとお互に、必なくとも僕を中傷しようとした君の心事が解らんではないか。デ君が現行犯を發見したと言ふのかどうか。」

「僕はソンな事は知らないよ、又其の本人即ち君と彼女教師と教室を出る時赤い顏をして居たと言ふ事實だけが問題になつて居て、何等ソンナ現行犯を見附けたものも居ないんだ。」

「スルト君等は相像に依て人を中傷するんだね。」

「中傷するんだないよ。」

「ケレ共現行犯もおさへずに言ふ事は中傷だないか。」

「ケレ共中傷と言ふ。」

「イヤ、一寸まち給へ、事實想像に出るんだないか、ソシて自分の親友――デモなからうが僕を――中傷し僕に挑戰するんだね。」

「ソンな挑戰したり中傷したり僕はするものでない。」

「ケレ共挑戰だないか、中傷だないか。」

「ソンなに君が怒る理由がないと思ふ。大體元來君と何等關係が僕にはないんだから。」

「ソレは君の逃げ口上と言ふものだ、良う考へてみよ、僕と何等關係ない事で僕の名を出すてふ必要があるか、ソレはたしかに君が僕に挑戰的に出たんだ、ソシて僕を中傷しようとかゝつた計畫なんだ。」

「ソンな事は……。」

「イヤ、マテ、デ君が僕を中傷しようと挑戰しようと僕には何等ソレコソ關係がない。所で僕も覺悟があるからね。如何なる手段を取つても應戰はして見せる。」

「ソンなに怒つてくれては困る。」

「怒らんまいのもか、怒るとも怒るとも、僕も男一匹何所迄でも挑戰するゾ、」

「ソレはあまりにヒドい。僕はソンな考へだないんだ、デハ一つ君にお尋ねするが、君はあの學校で一番親しかつた女教師はと言へば彼女だらう。ツマリ戀愛關係てふものをぬきにして。」

「ソンな馬鹿な事をするものか、僕は男女の別なく、等しく同校の訓導として親しくして居たんだ。何も彼女だけに親しくするてふ事はないだないか。ソレは君のヒガメと言ふものなんだ。」

「イヤイヤ、ソウではなからう。」

「何、ソウではなからうて。デハ、ドンナ所がドンナ風に君の眼にはうつるんだ。」

「ソンな細かな事は言ひ得ないが、何だかちがふよ。例へば話一つでも他の女教師よ

りも多くするてふ様な事なんだね。」

「馬鹿言へ、例令僕が彼女に話を他の女教師よりも一つ二つ多くしたつたてソレが何だ。小學校の教師と言ふものはソンな少さな腹なんか。困つた奴のより合ひだね、ソンな少さな事でドウして教育が出來るんだ。男女の交際がドウして出來る。ソンな馬鹿な事を言つたら女子と話しする事も出來ないんだね。話する事も。ソンな小さな奴の集合が小學校教育てふ安價な教育者なんだね。在職中アノ教師はアノ女教師と一番話を多くしたからおかしいとか何とか、ソレは何も男であらうが女であらうが何等色慾關係を離れて、氣の合ふものと合はぬものとは當然あるよ。何程人の妻君であらうがなからうが、又妻があらうがなからうが、ソンナ事で問題が起る様だつたら女と一切話が出來なくなつてしまふんだね。教育者てふ職業はソンな馬鹿な小さな奴ばかりかな。では男教師が女生を教へたり、女教師が男性を教へたりも出來ないんだね。」

「ソレは僕の前に言つた主觀と言ふものだ。」

「スルと君等の主觀と言ふものは小さなものなんだね、」

「小さくても大きくてもソレは致し方がない。」

「ハ、ア、如何にも御もつともだ、シテ君は實際ソンな小さな胸なんだね。」

「ソレはドウでも良い。」

「ソンな事で要するに我輩を中傷し僕の名まで出したのだね。何だ。」

「中傷はしない。何とか君も怒つてくれぬ様にと思つて居たものだから……。」

「イヤ、ソレは解つてゐる。僕も君を友人と思はなかつたら直ちに挑戰的に出て居るが、此所まで來てもらつたと言ふ事はソレはソコに何等か君の誤解をとき、一致點を見出したかつたのだ。實際ソンな事では教育と言ふ様な仕事は出來ないんだ。男と女とが話しして居たからおかしいとかどうとか。ソンな先生達ばかり集つて居るから教育も進歩しないんだ。所で君に此所で斷言して置かうと思ふ。ソレを信じると否とは君の自由だ。君の言葉を貸りて言へば君の主觀だ。ダガネ、僕は三四十分間音樂教室へ入つて居た事は事實だ。ソレから彼女もソコに居た事も事實だ。次に僕はピアノを彈いて居た事も事實だし彼もピアノを彈いた事も事實だ。所で話は音樂上の事だけ、僕

も彼女も色話と言ふ様な事は一切しないよ。ソレから彼と僕とは衣服一つ接して居ないよ。赤い顔をして出て來たか來ぬかは我輩は知らぬが、彼女は我輩に向つて秋波を送つた様な事は一切ないよ、次に彼女は我輩にラブはして居ないよ。又我輩も失禮なから彼女にラブはして居ないよ。將來に於てドンな風が吹いて彼女と僕とがお互に夫婦約束をする様な事があるかないかはわからぬ。私は人生の將來を易者が豫言する様な事は僕には出來ないがね。ダカラ現在及び過去に於てはお互に神聖なものなんだ、決してお互にラブなんかして居ないよ。デ先づ安心してくれたまへ。ソレは僕の言葉を信ずると否とはツマリ君の所謂主觀だ。ダガ之だけの事を君の目の前で發表して置く。ソシテモ一つ君に問ひ度いが、君が先から、僕は責任があるとか何とか言つたが責任つて、彼女に對する君の責任つてドンなものなんだ。ソレも言ふと否とは君の主觀だらうが。」

「イヤ別に大した事ではないが、あの女教員は僕の先の學校で同勤して居た事と、今度此の學校に取る事になつたのは僕が交渉に行つたのだから責任があるんだ。」

「ソレだけなのか。」

「ウン、ソレだけなんだ。」

「スルト、其の君の今言つた責任觀を以て校長にもあらぬ、言はゞ君と同僚の彼の女に人格を無視した様な失禮な注意を與へたと言ふんだね。」

「イヤ、ソレは僕の責任上注意した迄だ。何もソンな深い考へから言つたのではないよ。」

「僕は今一つ君を信用が出來ない。僕の名を出してまでか弱き女性に注意を與へる位ならば、何故に僕に直接整々堂々と言つてくれなかつたのだ。僕に言はないで、責任あり責任ありと言つて彼に大變な事を言ふとは誠に以て僕を馬鹿にした話だ。」

「イヤ、ソンナ……。」

「一寸まち給へ。大體君が責任あり責任ありと言つてソンな事を言ふてふ事は、君がヤイて居る證據だ。君が彼女と僕と話したり、音樂教室で話したりした事を悋氣したり嫉妬したりして居るんだないか。オカシイのは彼女と僕とでなくて君自身だない

か。」

「イヤ、お話を承つて見ると或はソウかも知れん、僕が恪氣して居たからかも知れない。ドウも僕が輕卒であつた樣だ。何分許してくれ。僕は此の件だけは誠に輕卒であつたと思ふ。僕が君の名を出したと言ふ事はたしかに良くなかつた。が責任は何所までもあるからね。」

「ウン、ソウか。一寸尋ねるが、君は彼女に對して責任があると言ふが、然らば彼女の貞操までも保證しなければならぬ樣な責任があるのか？　言を換へて言へば彼女の生殖器までも君が保證する程の重い責任があるのか。」

「ソンな事はない。」

「デモさうだないか責任々々と言ふが。」

「イヤ、ソレも僕が惡かつた。思ひちがひをして居た。」

「デ君に言つて言く。例令僕は君が言ふ樣に眞に彼女と戀に落ちて居て、實際は決してソンな人間とちがふがだね、之は例へばだよ。例へば彼女と僕とが眞に變に落ちて

居て、假令同衾して居ようと、ソンな事を彼此れ君等が心配して君の責任觀を振り廻す必要はないんだ。風評として二人を中傷しようと否とは君等の勝手だが、彼女にソンな事を注意する責任はない、絶對に君にはない。實は僕自身もソンな事を言ひふらされては困るので、先日も彼女の宅へ行つて家族に會つて、家族全體を前に置いて發表して置いた。スルと家族の曰く、何卒、あなたに一任するから如何なる風評が立たうとドンなにならうとあなたを信じます。何卒指導してくれ、責任以て、總ての責任觀を以て御依頼する。テウ事だつた。責任觀を以てすれば君よりも僕の方が餘程重いよ、ドウだ。」

「ドウも有難う、僕もよく解つた。今後も何卒仲よく交際してくれ、ソシてお互に彼女の幸福をいのつてあげようではないか。ソシて君がソコまで言つてくれた事を感謝して置く。」

×　×　×　×　×　×　×

前略御めん被下いませ。一昨日の音樂會ではほんとうに失禮致しました。あの日は

姉の子供と少女歌劇を久しぶりにて見に行かうと思つて○○さんのお宅を訪れました所、○○さんは音樂會に行かれる所なんでしたもの、つい誘はれてしまひました。

××様、まことに突然に謎の様な事を申上げますが、私が音樂會に參りましたと言ふ事は、決して○○校の方には言はない様にして下さいまし。此の事についても是非申上げたいと存じますが機會がありませぬから思ひ切つて筆取りました。私がこんな事を申上げたと言ふ事について誤解のない様にくれぐれも御ねがひ致します。

××様、世界と言ふ大きな舞臺から考へて見ると何とした事なんでせう。私とあなたとが音樂教室に三四十分居たと言ふ事。ソレが或る人等の問題になつて居る相で御座います。あなたにはこんな噂のあると言ふ事を御存じないでせう。何とした開けぬ世の中――教育界なんでせうね。私は先日から四五人の方から聞きました。ほんとうに何と言ふつまらない誤解なんでせう。けれども又考へ直して見て私達が悪かつたのかもわかりませぬ。しかし二人が音樂教室に居たと言ふ事だけでは餘りに可愛想ぢやありませぬか。私はあなたが異性でいらつしやると言ふ觀念もなく、只自分と同じ様

に考へて、ソシて自分にも自分自身何等疑つて居なかつたのです。

××様。ケレ共、少し小さな舞臺から見ると、異性と言ふ者を大きな目で御親切にも常々見張つて居る者がある事に氣がつきました。ほんとうに籠の中から出たばかりの私がこんな事を考へて心配しなければならぬかと思ふと、つくづく此の教育界てふ小さな舞臺がいやになつて參りました。先日も或る所で或る學校の先生が他の或る學校の先生に右様な事を聞かれた相です。其の時ソンな事は更に知らないと申されたと私にお話がありました。誤解は誤解を生み、邪推は邪推を生み、一犬虚を吠えて萬犬眞を傳ふとか。ほんとうに人は信用が出來ないものだと思ひました。

××様。私とあなたが三四十分間ピアノを相手に彈奏したてふ事が何故にソンなに問題になるのでせう。私は開いた口がふさがらず。苦笑せずには居られませぬ。けれどこの様なつまらぬ噂が他日お互の家庭へでも聞えると言ふ事はたへがたい苦痛ですからソレが氣になりまして今晩思ひ切つて筆取りました。音樂についても種々の御教にあづかり度いと思ひますがソンな元氣が出なくなりました。只之だけ思ひ切つて筆

取りました。くれぐれも誤解のない様におねがひ致します。裏書も私の名を記入しようと思ひましたが、ワザと無名に致しました。失禮だとは存じましたが又々誤解をまねく様な事があつては困りますからと思ひましてさしひかへました。御許し被下いませ。尙又今私がこんな手紙をあなたにさしあげた事も何卒絶秘にして被下いませ。何れお目にかゝる様な機會もありましたら萬々申上げ度いと存じます。

十二月十四日　　△　△　子

×　×　様　御前に

×　×　×　×　×　×　×

貴書を拜見致しました。昔から君子は危きに近よらずと申します。今回の小さなお腹の奴共がグズグズ言つたと言ふ事は私も風のたよりに聞きました。シカシ君子危きに近よらず式に論ずれば確かに我々二人の失敗だと思ひます。が教育界は社會の文化に一番後れて居ます。ソレは教育が後れて居るのでなくて教育者と言ふものが後れて居るのです。私とあなたが音樂教室でピアノを彈じたと言ふ事は公明正大なものです。

何人が何と言つたつて疑ふ事は出來ませぬ。神は我と共に居ませり。黑白は神が知つて居ます。私は此の小心能々なる教育界に一つの爆烈彈を投じてやらうと思つて居ます。お互はお互に眞理に向つて突進致しませう。ソシて可愛想な彼等教育者、思想も主義もなき教育者、自覺なくして德川時代の夢を見ている奴共の眼をさましてやらうではありませぬか。お互がお互で公明正大なり、善なり、眞理なりと信じて居る以上はソンなクダラヌ奴を相手にしたつて致し方がありませぬ。公然とお目にかゝつて公然とお話致しませう。御心配は御無用です、神は我と共に居ませり。

十二月十五日　　×　×　生　拜

△　△　子　様　梧右

小學校教員は男女がお互に話して居たらモウおかしいのだ相だ。小學校教員は小心なものだ。ソンな人間に西洋の舞踏なんかを見せたら、發狂してしまふにちがひない。小學校にも際分に進歩した明瞭な頭腦の所有者はある。ガそんな人格は僅少なものだ。多くは男女がお互に話でもしようものなら、スグおかしいのだ相だ。小さな天地に井

底の蛙の様な生活をして居る者はさもあらんなれど、大海を知らぬあはれさよ。ソンな小さな人間でなければ小學校教員はつとまらぬのだ。ソシて少しでも開けた新文明を呼吸した、進歩的能力ある、眞の教育者が居るとよつてたかつて虐待するんだ。男女關係など言ふとすぐ官僚俗吏は目を丸くするんだ。すぐ罪惡視するんだ。困つた奴どもの集合だ。私はソンな人間を見る度に可愛相になつて來る。一度井底から引きづり出して大海をみせてやり度い様な氣がして來る。實業の日本社が嘗て小學校長の亞米利加の視察を斷行した。私は實際よい事だと思つた。天下の富裕なる人間は自分の子供の爲に小學校教員にチト外國を視察せしめると良いと思ふ。ツマリ延いては自分の爲なんだ。自分の子供の爲なんだから、又我國教育の爲なんだ。

大體小學校教員なんか言ふものは人種がちがふんだ。今の小學校教育者に言はせれば、不具者の様な獨身生活や禁慾論者を以て男女道德の神の如く思ふんだらう。ソレが人間として不具的のものだと言ふ事を知らずに、實にあはれなものだ。私は先日モーパッサンのベラミーを讀んだ。があの様なものは官僚や教育者には敵なんだからお

話にならぬ。音樂教室で男女教員がお話をして居ると校長なんか言ふ道具――兒童を教へる機械――は振ひ上つて居るんだ。或る視學は「男女教員の問題を私はよく理解して居るから十分に同情と親切を以て所分する。決して惡くは取扱はない。」と言つたとかで教員間にエライ人だ。よく開けた人だとて評判になつたとか成らぬとか。ソンな事はあたり前の事だ。ソンな事をしも理解しなかつた俗吏が澤山に居たのだから從來は隨分に無茶苦茶をやつて居たものにちがひない。私は此の視學は現代の無能な俗吏としては一歩進んで居ると思ふが、別に驚く程にエラくるなければソレであたり前だと批評して置いた。實際教員の男女關係、同僚間の愛なんかをゴテゴテ言つて居る様な事では眞に困つたものである。別に關係なんか少しもなくても只話さへすればそれでおかしいんだ相だからタマらぬ。ソンな教員は去精してしまつて生徒番位させて置くが良い。ソンな教員は現代の雜誌や新聞に出る小說なんかを罪惡の文學だと思ふだらう。暗の様な教育界、井底にすむ小さな蛙の如き教育者、嗚呼ソレが我大日本帝國の教員てふものなんだ相だ。我帝國の教育はかくして小天地に畏縮してしまふんだ。

却説此の男女關係問題は其の事實の眞否如何は別として隨分に種々なる處に使用――應用――さるゝものである。殊に小學校の男女教員に應用さるゝ場合は多くは其の効果を奏し、隨分に其職を抛棄しなければならない樣な事に立ち至るものである。ソシて又小學校の男女教員なんかは實際弱い者である。社會の人からは道學者の如くに見られ、古い古い道德に立脚した通俗眼を以て見られ、薄給に泣いて居る彼等、ソンな者を落し入れるには男女問題を持ち出す事が一番だ。例へば教員お互の間に起つた黨派的の事があるとする。其樣な場合にはキツと敵の方の男女關係を持ち出すのである。又村や町などで其の土地の人々が小學校教員を排斥しようと考へる樣な場合には男女問題なんかは良い武器なんだ。例へばソレが決して事實でないとした所が、實際の如くに言ひ振らす場合には、火のない所に煙は立たずだなどゝ變な論理を持ち出して葬り去らうとする。實際教員だつたて男と女であり、立派な人間であるから、美しい女を見ては美しいと思ひ、醜い女を見ては醜いと思ふのは當然なんだ。若し美しい男を見て醜いと感ずる樣な女教師があつたなら、ソレは感覺を失つたツーリ不具者なのだ。ソンな教員は教員としての價値を失ふ。私は同職がお互に美しい自覺した戀愛に依て結びつく事に何等の悪い所はないと思ふ。又ソレが教育上決して悪い結果を被教育者に與ふるものではないと思ふ。私は自分自身の體驗上の問題を持ち出すわけにはゆかない。ト言ふのは私にソンな體驗が少しもないからである。私は人が愛してくれた事はあつても自分て女性を愛した事はないから、眞に私が私の體驗上の事を持ち出すわけには行かぬが、私に體驗がないからとて之を批評する事や同情する事は自由なのである。ソノ樣な男女職員の關係なんかは或る嚴密な意味に於て大に奬勵すべきものであると思ふ。お互がよく常に知り合ひ、其の長所も短所もお互に理解しての上だから、ソレがお互に夫婦約束と言ふ清い結合をするには最もよき方法だと思ふ。お互に理解もなくして一度や二度の、時には寫眞位に依つて結婚すると言ふ無暴の方法に比較すれば頗る進歩的の方法だし、文化的の事實だと信ずる。私は男女教員がお互に理解し合つて清い結婚をするてふ事を大におすゝめ致し度いと思ふ。又ソンな事を問題にする樣な社會や教育界のヤクザな人物はよい加減に顧みないが良い。土偶や、地

藏尊に如何に説明したつて聞いてくれるものではないのである。但し誤解のない様にしてもらい度い。徒に無自覺な男女の交渉は至つて危險であり、又ソンな事が人性として幸福なる將來をもたらすものでは決してないと言ふ事である。一たん夫婦約束をした以上は、私が本書中「かゝる女性を敎養してもらい度い。」の節に書いた通り、あの様な女性を理想とする者である。私は本節に於て決して男女の無自覺な亂行を奬勵する者ではないと言ふ事を承知して居てもらい度い。

× × × × × × ×

「君、例の女敎師はドウしたのだ。」

「アレの話は其後あまり聞かないよ。アノ問題が起つた當時から大分に淫亂な奴だと思つて居た。」

「所で又他の學校では大分に大きな問題が起つて居る相だね。」

「××小學校の事か。」

「ウンさうだ。」

「何とか上木とか言ふ女敎師が村の青年と駈け落ちをしたと言ふではないか。」

「ソレは新聞に書いてただらう。」

「新聞には大分にヒドイ事書いてたね。アノ様な事は實際なんだらうか。」

「實際だと言ふ話だよ。昨日T君が遊びに來て話して歸へつたゞけ。」

「アノ女は僕も知つて居る。美人ではない様だ。」

「ソレはさうだ、ドチラかと言へば醜い方だ。」

「アンナ女に戀する馬鹿もあると見えるね。」

「ソレは別さ。理論上の事ぢやないよ。」

「アノ女は青年と駈落ちする前に村長や助役と一所になつて居たと言ふではないか。」

「村長ぢやない。村の收入役だよ。」

「收入役て言つたら××君の事だらう。」

「サウだ。」

「アノ男は美しい妻君を持つて居るぢやないか。」

「ダカラさ、理論上の問題ではない。戀と言ふ者はね、變なものなんだから。」
「大分にさとりを開いた様な事言つてるね。」
「ソレはさうさ、開けなければ教育なんか言ふ商賣は實際つとまらんよ。」
「先日××君が來てたがソンな事どもは有り相にして居なかつたよ。」
「ソレはさうだ。ソンな事を君に言へるものか。」
「實際小學校の男女教員問題は困つたものだね。」
「困つた事はないだないか。ソレが實際眞劍に愛して居たと言ふなら。」
「デモ何だか先生と言ふ看板でゞもね。」
「ソレは君、君はまだ開けて居ないよ。」
「さうだらうかね。」
「△△の話を君は知つてるか。」
「知らないよ。何だか此の頃變に化粧してると思つた。」
「アレはなかなか大した問題だつたと言ふ事だ。」

「ドンな事だ。」
「何かオゴらんかい。少し位はオゴらんとお安う話も出來ないぜ。」
「何でもオゴルよ。」
「デハ話さう。何をオゴルんだ。」
「マア何でも良い。今に御馳走するよ。」
「デハ話さう。□□小學校のHと言ふ男を知つてるだらう。」
「ウン、知つてるとも。」
「アレが△△と關係したと言ふんだ。」
「ホントウか。」
「ソレは事實だ。巡査の厄介にまでなつたと言ふから。」
「巡査の厄介とは又どうしたのだ。」
「何でも△△と言ふのはY君の宅の離れに下宿して居る女教師だらう。ソレが面白いんだ。Y君の宅は門がまへの大さな宅さ。デ離れまで行くには門を入らんければなら

ぬ。所がHが先日の暗に乗じてソノ離れへ來たと言ふんだ。所でHが來たのは午後の十時頃だつたのだらう。先づ門を開けようとしたら午後十時だらう。田舍の事であり。Y君の宅は皆寢てしまつて居たのさ。デ鍵をかけてたと言ふんだ。ソコでオイオイと呼んだが返事がない。Hはあまり夜遲い事であり△△はモウねてしまつたなと思つたのだ。雪はボツボツ降るし身を切る樣に寒い。此の門の奥には一日も一時間も一分間も、否とよ一秒間も忘るゝ事の出來ない戀人が枕を高くして寢て居ると思ふと立つても居ても居られなかつたとの事さ。」

「オイ、冗談だないぞ。」

「冗談だないよ。ソンな風だつたと。アイサボーズだ。」

「アイ、サボーズはよして事實だけだ。」

「ケレ共ソレは事實だよ。オレもそんな氣に一度なつて見たいと思ふね。身命も賭して戀する女が居たらなあ。」

「オイ。馬鹿を言ふな。冗談だないよ。デ、ソレからHはドウしたと言ふんだ。」

「何でも高塀をのり越して離れまで入つて行つた。と言ふ話だが問題は此所から起つたのだ。」

「ソレは又ドンな問題だ。」

「何。君。塀はのり越して入つたは入つたし、離れへ行つて雨戸を盛に打つたが聲がテンとしないだてさ。」

「ウン。それから。」

「それから雨戸を外して中へ入つたとさ。」

「ウン。それから。」

「それからが面白いんだ。ハ、ハ、、、、。」

「オイ。話せ話せ。」

「ソレからが面白い場面なんだがね。ホントにオゴルかい。ホントに。」

「ソレはホントだよ。ソレを話さんければ御馳走しないんだよ。」

「デハ御馳走してもらつてから話す事にしよう。」

「ソンな馬鹿な事があるか。話せ話せ。」
「デハ話すがね。何でもないんだ。」
「冗談ぢやないよ。嘘か。」
「嘘ぢやないよ。眞實の所何でもなかつたのさ。」
「デハ△△は居たのだね。冗談は良い加減だよ。」
「イヤ、△△が居たら天下太平だ。何も心配するには及ばぬがね。」
「ウン、デハ居なかつたのだね。」
「ソウだ。何だか兄が死んだとかで國とか何所とかへ歸つて居たと言ふんだ。」
「嗚呼可愛さうにね。デ、雪の道をトボトボと歸つて行つたと言ふ悲劇だね。小說にでも成り想だね。」
「ガ悲劇の幕は之からだよ。」
「ウン、ドウしたんだ。」
「ドウもコウもならない事になつたと言ふのさ。」

「ソレは又ドウしたのだ。」
「ドウしたつて、實は夜十時、雪は全山を埋めてさみしき月光は戀人の居なければならぬ離れ座敷をてらして居たとさ。デモ戀人は矢張居なかつた。ハテ己は家ちがいをして居るんではあるまいかと。マッチを摩つて室内を見たと言ふんだ。矢張り我目ざす目的陣地は此所にちがはないが――嗚呼我目ざす敵は――否とよ我戀人は枕を高うして寢ては居なかつたのだ。」
「死んでゞも居たのか。」
「イヤ、先に言つたちやないか。」
「ウン、ソウダ、忘れて居た。國へ歸つて居たとかで。」
「ウン、デね、不思議でならず。室の中を見廻した。所が我目的地點にはちがひない。薄ら明りで見廻すとだね。△△の手慣れた琴はチャンといつもの通り立てゝある。小さな机に自分が送つた寫眞が一枚さみし相に乘せてある。常々學校へ着て行つて居つた△△の常着はチャンと衣桁に掛けてある。鏡臺の上には白粉の入れ物が二つとヘイ

ヤービンが一本と。」

「オイ、冗談を言ふなよ。君は見て居た様な事を言つてるね。君の所謂アイ、サボーズはよして眞實の話をしてくれよ。」

「眞實だよ。」

「馬鹿を言へ。ソンな事がわかるか。」

「己にはわかつてるんだ。」

「馬鹿臭い事はよせ。デどうしたのだ。」

「歸るより方法はないさ。デ、外した戸を元の通りにして高塀を越えようとした刹那、其刹那。オイ、可愛さうに巡査につかまつたとさ。」

「盗賊とまちがつたのだね。」

「エライ盗賊さ。君正服正服の○○小學校の帽章が頭にチャンと輝いていたのだ。」

「オヤオヤ。」

「デ巡査はビックリしたのだ。」

「そうだらうよ。」

「所で實は巡査が見つけたのぢやないのだよ。」

「フン。」

「ソレは先から行つてる通り日が塀を越したり、離れ座敷の戸を外したりして居る所を家人が見附け、テツキリ盗賊だと思つたのらしい。戸を外したりしたらソレは家人にも見附かる筈だ。デ裏の勝手口から下女が近所の交番に急を告げたのさ。お廻りさんはスグ出て來て塀を越す所をつかまへたのさ。」

「フン。」

「面白いね。」

「面白い所か、可愛想だらう。」

「所が。所が。所が。オイ御馳走は。」

「今する今する少しまて。君の話を聞いてからでなければ出來ないんだよ。」

「デ話すがね。巡査につかまへて交番へ行つたのだ。所が盗賊とはちがつたが、巡査

もつかまへた以上は何とか難をつけるんだ。家宅侵入と言ふ事になつたのだが。Yの家では盗賊だと思ひ切つて居たので交番に届けた迄だつたが、ソンな事とは知らず、夜遅く村の校長さんを呼んで來て何とか成りませぬかと相談をした。所が校長さんも困つた。自分の部下の教師にソンな者を出しては學校の恥、村の恥、校長は責任を負はなければならぬと言ふので急ぎ交番へかけつけた。駈け附けて見るとHは隅の方の椅子によつてションボリとして居たとさ。」

「ソレはソウだらうよ。可愛想にね。」

「デ校長さんは常々心やすくして居る巡査でもあり、Y家と仲直りをしてすませたと言ふんだ。」

「仲直りで其の話は終りか。」

「ウン、之で次は御馳走の番だ。」

「ホントに終りか。」

「ホントだよ。己が嘘を言ふかい。」

「デハ御馳走しよう。」

× × × × × ×

舊都だからとて春は矢張り新しい。千有餘年の長い歴史を持つて居る神さびた都も壯嚴なる皇居を止めて今は長閑な別天地である。蒲團着て寢たる姿の東山も次第に賑ひできて、大宮人が行きかふ源氏物語の繪卷物を見て居る樣に管弦の境を作る。何所からともなく飛んで來た名も知れぬ小鳥が禁苑のあちらこちらを占領してオーゲストラを奏する。建禮門へ通ずる堺町御門の正面大道には、美しうしきつめられた白いバラスの中を、時々自動車などが警笛を鳴らして疾走する。禁苑の中には大原女が三三五五、長い竹の柄のついた熊手を持つて柵内の芝の中の塵を取つたりして居る。緑色の花やかな洋傘をさした島田の女、子供の手を引く紳士、バットを持つた書生。松蔭女學校より歸るマチ付きの紫袴を穿いた女生徒などがわきめも振らずに過ぎ行く。市役所の時報機が奇妙な音を立てゝライオンボイスをうなると同時に、御所に接する同志社の大時計が高く御苑を見下す樣にゴンゴンと禁苑にひゞき渡る。松の緑に春の

氣分がみなぎつて、條かべの白高塀が綠を切つて直線美を發輝して居る。此所は神聖なる禁苑の一部である。舊都の令嬢達も春の來た爲か、常にはクラシカルな箱入りの境を脱して所得顔に散歩に出かける。寺町御門を入つて仙洞の南を通ずる大道を西の方へ曲つて行く茶縞の金沙のそろひにて如何にも氣達のやさし相な女、行きかふ人に振返りみられながら北に折れて御所の東側から今出川に出て行く道を、猿が辻の所で折れて西に曲つた。

舊都の春はまことにみやびやかである。

Mは煙草に火をつけた。ソシてマッチをポケットにしまふと同時に片手で時計を出して見た。

「矢張り今の午報と合つて居る。」

「早や十二時ですね。」

「電車にでも乘りませうか。」

「私はかまはなくつてよ。コンなにしてトボトボと歩く方がいいんぢやないの。」

「ソレもよろしい。デモ何だか電車に乘り度いですね。」

二人は寺町御門の所から廣小路の停留所へ出て行つた。南行電車が出ようとして居る。二人とも飛び乘つた。Mは回數乘車券を取り出して「四條寺町」と車掌に告げた。

「四條の……寺町ですか。」

車掌は何氣なく一枚を切つた。

「今一枚だ。」

車掌に二枚切らせて右手に持つた。電車は寺町二條のカドを曲つて木屋町を南に進んだ。四條小橋で乘りかへをせなければならぬ。

「貴方、下車ですよ。」

二人は電車から下りた。

「寺町と言へばすぐでせう、歩きませう。」

「四條通りの電車も實際遲くてね。」

四條通りから寺町京極へかけて人間がゾロゾロと流れ込む。男も女も子供も大人も貧乏も金持も、皆京極と言ふ小さな通りへ南よりも北よりも流れ込んでしまふのが丁度何かに飲まれてしまふ樣だ。活動寫眞館がズラリと立ち並んで美しい畫看板が人の目を引いて居る。

「歌劇が參つて居ますね。東京の」

「アレはなかなか良いと言ふ評判なんだが。」

「今日は日曜で滿員ばかりね。」

「滿員でせうとも學生なんか盛に入つて居ますからね。石井漠と澤モリノなどの名も出て居ますね。モリノのトーダンスや石井漠の默禱は實際良いですね。」

「私も一度見た事はありますわ。何だか舞臺を黑くして置いてね。香を焚いて煙がスーと昇る所なんか實際佛敎趣味の所が良いと思ひますわ。私には何だかわかりませんが、手を上げたり下げたり延ばしたりして變な事を致しますね。」

「私もあの靜かな、ソシて何だか言ふに言はれぬ莊嚴なひきしまつた感じを與へる中に、ピアノの音が重々しく奏せられる所なんかの氣分は良いと思ひます。

「ドコかで中食でも致しませうか？」

何の遠慮もなくお互が理解し合つた中で中食すると言ふ事はMの心に强烈に響いた。

「ドコが良いでせう。」

Mは問ひ返して見たS子に何か心當りでもあるのかと思ひつゝ、自分は何所へでも參りませうと言はぬばかりの氣分がS子によく取れた。

「デモ私なんか知らないわ。貴方のお酒を召し上るのに最も氣分の良いところなのよ」

「京極はほんと言へば駄目ですね。貴女は何が良いの。」

「私は何でもいたゞきますわ。何所へでも行きませう。」

「デハ、サア、圓山公園の方へ參りませうか。」

「デモね。今日は日曜でせう。ソシて都の人々が春に醉つてる時ですわ。隨分に澤山な人ぢやないか知らん。」

「ソレもさうだね。」

二人は夷谷座の前で又南へ折れた。

「デハ今日は圓山公園はよして更科でゞもやりますか、翁亭へでも入りますか。」

「私翁亭てば知らないわ。」

「デハ一度おとも致しませうね。」

「ドンな所なの、ユックリと落ち附いてお話でも出來る樣な場所なの。」

「大丈夫ですよ。一寸上品にしてくれますから。」

「デハ參りませうね。」

二人は京極を東に入つて繩の暖簾をくゞつた。奥の離れの四疊半へは女中に依つて火鉢と菓子が運ばれた。

「良い所ね。上品だわ。」

「上品な室でせう。私此の間が一番に氣に入つてるのですよ。私は何所へ入つても室の氣に入らないところでは物をたべてもちつともうまくないんです。」

「貴方、度々此所へいらつしやるの。」

「いや度々と言ふ事はないです。」

「あまりお酒をめし上るといけないわ。」

「少々位は何ともないんです。」

「校長もお酒はあまりいけないのね。」

「アレもあまり飲みません。」

「昨日も何だかお酒の事についてお話をしていらしつたですよ。何だか酒はいけないつて。」

「さうでせう、あの太つた體ではよくないでせう。」

「先日のK先生の送別會の時は隨分にいけましたわ。」

「アレは思ひ切つて飲んだのですよ。」

女中が酒と御馳走を持つて來た。ソシて女連の御客だと思つてか氣を氣かせてサツサと出て行つてしまつた。

「一杯飲みませんか。」

Mは酒杯をS子の手の上へ押さへ付ける様に置いた。ソシてS子の顔を覗く様に見た。

「私、私いけないわ。」

S子はMの手に持つて居た徳利を取つて、

「私、お酌しますわ。」

Mは杯を出して一杯受けた。ソシて、

「あなた一杯や二杯は飲んでもいゝ。」

「デハいたゞきませうよ。」

彼はS子の持てる杯に酌して下に徳利を下すとスグ手を打つて女中を呼んだ。

「何か洋酒はないか、葡萄酒でもいゝ。いゝねSさん。」

「葡萄酒なれば少し位は私いたゞいてもいゝんです。」

「デハ、直ぐ持つて來てくれ。」

女中は立つて葡萄酒を取りに行つた。ソシてソレを置いて又すぐ出て行いた。

「K先生の御家庭はどうなさつたの。」

「アレですか。アレは妻君を歸したゞけです。」

「デモね可愛想に、何故でせう。」

「矢張り合はないんですよ。」

「合はないと言つたつて良い奥様ぢやありませんか。」

「良い悪いと言ふ事は一寸判定に困難な事ですね。由來夫婦と言ふ者は大變にむづかしいものでね。只顔が美しいとか、字がうまいとか。器用なとか、ソンな事はで批判がむづかしいんです。」

「ソレはさうかも知れません。」

「私はいつも考へて居ますが古い古い道徳觀で結婚した奴は皆失敗だと思ひます。例へば親の爲に結婚するとか家の爲に結婚するとか言ふ奴ですね。結婚と言ふ事はお互に男女の理解に依つて成立するもので、何も家や親の爲に結婚するんぢやありませ

ん。」

「ソレはさうでせう。」

「實際お互に理解もしなければ男の職業に同情もない様な女子と結婚したりすると言ふ事は一の道德上の罪人ですよ。」

「私もさう思ひますわ。私のお友達の方にね、ソンな方がありますの。ソシて御主人は毎日家へ歸つても面白くないと言つて夜遲くでなければ、ソレも何所かでキツと御酒を召してお歸りあそばすの、私あの様な奥様になつたらつまらないと思ふわ。」

「デハどんな奥様になりたいの、ハ、、、、。」

S子は一寸顏を赤らめて、

「ドンナつて別にソンな事を具體的に尋ねられては困るわ、理想なんかありやしないわ。」

「デモ何とかお考がありませう。」

「私何も考へてやしないわ。唯貧乏でも夫婦共稼でも良いから私を十分に大事にかけてくれる夫が良いと思ひますわ。」

「スルとあなたは自己主義ですね。」

「デモ。」

「デモ自分だけ大事にかけてくれる男。」

「ソレはあなたの思ひちがいよ。私も大事にかけるわ。」

「すると雙方からお互に大事にかけ合ひをするんですね。」

「ソレはさうよ。お互が理解して居たら……ね、さうでせう。」

「お互が理解し合つて居ればよろしいがK君の如きは如何です。其所で問題はソノ様に夫婦となつて理解し合ひ、相愛し合ふ様な男や女を如何にして決定するかと言ふ事です。例へば私とあなたがかうして心安くして居る。兄弟の様にして居ると言ふ事にして、さてデハ若しお互が夫婦になると必らず永久に、死ぬまで理解し合つた。相愛し合ふ仲となれるかどうかと言ふ事を明にする方法はありませうか。」

「ソレはむづかしい事ね。しかし一度夫婦になつてしまへば致し方がないわ。K先生

の様に離縁なすつたりしては私いけないと思ふわ。」

私はお互が十分に理解し合はない様なものと結婚すると言ふ事は罪惡だと思ふし、又十分に愛する事が出來、相愛して貰ふ事も出來る様な相手を見出す迄は決して結婚してはいけないと思ふ。」

「デハ一生ソンな男女が見つからないかも知れないわ。」

「デ其時は一生結婚してはいけない事になる。」

「ソンな事は私淋しいわ。獨身生活なんか私不自然だと思ふわ。私自身にした所が矢張り手縁りになる様な夫がほしいわ。」

「ソンな手縁りになる男がない時には。」

「ね！　どうでせう。」

S子は德利を取り上げてMの杯に酌した。

『私十分だよ。モウ此上はいけない。』

「デモ。」

Mは注いでもらつた杯を乾して、

「一つ献杯！。」

「ソンなに飲んでは私いけないわ、此の通り顏がホテつて來たもの。」

「私が居ますよ。少々位は醉心知が良い。」

「デハ、私目が變になり出しましたわ。あなたいけないわね。女に澤山のませて。」

「ケレ共僕の爲にね、醉つてくださいよ。」

「ソンな無理な事はいけないわ。デハ私の爲に飲まさせない様にしてほしいわ。お互よ。」

「ハ、、、困りましたね。一本變りました。」

Sは帶の間から小さな携帶の鏡を取り出して見た。眉毛の至つて濃い、垂れ頰の、髪を前の所で七分三分位に兩方へ分けて後ろの方で垂れかゝつた様に結つて居る所へ翡翠の大きな簪をさして、其横の方をヘーヤピンで止めた下の所から肌の白い美しいそして柔らか相な首筋が、黑い到つて濃い髪と調和して、Sの目には何かの化粧品の

ポスターの美人畫が目の前に淺像の如く浮いて居る樣に、氣分よく回つた醉に、茫然としてしまつて居た。一寸笑顏をした拍子に笑窪が可愛ゆく出る。二三杯の葡萄酒に兩の頰を少しばかり赤らめて、濃い眉毛の下からソレは明るさうな目が丸くチラリと輝くゝ垂れかゝつた後れ毛を右手を廻して二三度撫でた。ソノ拍子に赤い袖が眞白な腕を滑つて垂れかゝつた。

「あなた、まだいけませう。」

「私も十分醉つてしまつたです。」

とMは杯の中の殘りの半分を飲み乾して後ろへかくす樣に杯を置いた。

「ソレはいけないわ、あなたまだまだいけます。」

とMが自分の後の方に置いた杯を取つてMの手の上へ押しつけ、Mの杯の手の手首を握りしめて右の手で杯に酒をナミナミと酌いだ。

「ソンなに强いられちや困るね。」

「イヤあなた大丈夫だわ。」

Mは杯を左手で取り上げて飲んだ。ソシて下に下すと自分の煙草入れを出して敷島に火をつけた。

「あなたの奥樣になづたらサゾ幸福でせうねホ、、、。」

「私の妻ですか？　ソレは不幸ですよ。私の樣なものゝ妻になつてくれる人はソレは至つて不幸な人ですよ。」

「デモね。」

「私はね。私を眞險に愛してくれる人、寢ても起きても立つても居ても私と言ふ心と身を愛の火焰で燒き盡さざれば止まぬと言ふ樣な人ですね。絶對に心命を夫にさゝげると言ふ人ですね。一言一行總てが私と結んだと言ふ事を以て神の天國に遊んだよりもより以上の幸福だと信じてくれる、――心から眞實に信じてくれる――其の樣な人でなくてはならないと思ひます。天上天下に私より他には美男子はない。何所の天地へ行つても私より自分の貞操をさゝげる人はない。自分の貞操は絶對無限に此の人に與へらるべく神が創造して置いてくれたものである、如何に悲慘な境地に落ちようと

自分と言ふものは決して此の人より他にさゝぐべき天地はない。あゝ神は此の幸福なる夫を私に與へてくれた事を無上の光榮と名譽として神に敬しなければならぬ。嗚呼自分より幸福な女が自分程幸福な女が何所の天地に。世界廣しと雖も決して居ない。こんなに思つてくれる女がほしいですね。」

S子はMの右手を兩手で自分の方へ引いた。

「あなた。」

アマへる樣にして引いた手の上へ自分の顏を打ちふせた。ソシて泣くとも笑ふとも怒るとも悲しむともなく一種言ふべからざる面持ちをして、

「あなた。ね。あなたの奧樣になる人はほんとに幸福ですよ。ほんとうに幸福だわ。」

白い首筋が曲つてMの右手の上へ艶々しい髮の毛が頭の重みと共に押さばつた拍子に白粉の香が髮の香と一所になつてMの鼻をプンと刺戟した。

「私はね、僕の妻になる女よりもあなたの夫になる人は更に幸福だと思ふのよ。」

少し醉が回つたS子は、更に顏を上げ得ず、自分のハンカチを取り出して口のあたりから目のあたりへかけて撫せた。

「大分に飲みましたね。」

「今日は實際樂しい日でしたのよ私には。」

「ナゼ。」

「ナゼつて面白かつたと言ふんです。」

「さうでしたね面白かつたですね。御飯なりと言ひつけませうね。」

「ハイ。」

Mは下女に飯を言ひつけた。

「二人がこんな所で落ち合つて居ると言ふ樣な事は誰も知らないわね。」

「何、知りませうよ。」

「ホントにあなた小學校の先生なんかモウ止したらどうです。」

「ソンな事をしちや鼻の下が乾きますよ。」

「ソンな事ないわ。大學の方へでもお入りなさいな。」

「大學ですか。專科ですか。」

「今からであれば專科ですわね。」

「私は大學なんか嫌いです。肩書なんか少しも有難くは思ひませんよ。今の大學出の學士なんか御覽、隨分にいかゞはしい者も居るんでせう。私は實力で以てやり通す考なんです。ソレは至つてむづかしい事ではあるが、肩書や引きなんかでエライ者になるのは何でもない馬鹿でも出來ますよ。」

「ソレはさうね。」

「私は將來何所の天地でドンな生活をするやわかりませんが、多分落ちぶれて大阪か神戸あたりの勞働者の中間入りでもして、印半纏に鶴嘴と言ふ樣なハ、、、、私の將來はマアそんなものでせうよ。」

「何をおつしやるの私そんな事いやだわ。」

「しかし將來如何に落ちぶれても筆だけは離しませんからね。私の著書の廣告が新聞に出る時は私はまだ何所かの天地に生きて居るなと思つて居て被下。あなたが理想の

夫と自動車にでもお召になつて都大路を疾走される時には、私は電車の工夫位になつて車道の修繕位はして遠くから蔭ながら拜しますよ。」

「ソンな事言つちや私泣きますよ。」

「私はね。小學校の敎員ですが、今は。デモね。小學校の敎員位な者がエラ想な事を言つたつてだれも聞いてもくれまいとは思ひますが、私は實際肩書や地位や權利を振り回してエラ想に言つて居る奴共が、ソンな奴共を見るとタマらなくムカムカした氣になります。地位が何です、門地が何です、門閥が何です、金が何です、私は眞實の私は、嗚呼私は、小學校の首席の先生や校長さん位を失禮ながら校長位を望んで居るんではありませぬ。ソンな小さな天地に生活して何になるんです。肩書が何です。ソンな小天地に生活しようとは夢にも思つて居ないんです。天地は廣いものです。六尺に足らぬ此のM一匹を入れてくれる所は至る所にあるんです。私の過去十年間の敎育界の生活、此の虐たげられた生活、此の悲慘な生活、私は敎育界てふものに絶大なる恨をもつて居ます。私を虐げた官僚、私を虐げた俗吏、私を虐げた校長、斯くして

私は教育界の落後生となつてしまひました。しかし私は決して寸分の妥協も許さぬ男です。自分は生命を賭しても眞理に向つて進みます。眞理を崇拜します。私の崇拜するものは、肩書でもなく、名譽でもなく、金でもありません。私は決してソンな物質的の希望はもつて居ないんです。私が彼等官僚俗吏や老いぼれ校長位と少しも意見が合はないと言ふ事は、私は決して妥協と言ふ様な低級な無自覺な、己を殺すと言ふ様な事をしなかつたからです。私は何物の奴隷でもありませぬ。しかし私は眞理の爲の奴隷には成り度いと思ひます。私は、私は實に何とした氣隨な人間でせう。」

「あなたはエライわね。」

「何エライ事は決してない。唯一寸お酒が回りすぎて、こんな事まで喋り立てました。御許し被下い。デモ私は私の言ふ事をあなたが確に理解して聞いて被下ると思つて言つたのですよ。」

「ソレはさうよ。」

「御飯を召し上つたら如何。」

「さうですね。デハいたゞきませうよ。」

S子は一つの茶碗を取つて飯をつけた。ソシてMの前へ置いて、

「御召しなさい。」

「之は恐縮します。」

「私の御給仕はよくないかわからないわ。」

「ソンな事があるものですか。」

「デモねホ、、、、。」

「デモ、ドウしたのです。」

「H子さんがね……ホ、、、、。」

「あなた何言つてるんですか。私酒には醉つたし、あなたの美麗なスタイルやお顏には醉つたが心はシツカリして居ますよ。」

「ソンな事止しなさいつたら。私何だかソンな事おつしやるといやですよ。」

「でもあなたがH子なんか言ふからいけないのだよ。」

「デモ御氣に召すのでせう。」
「ダレが言ひました、ソンな事を。」
「ホ、、、、怒つていらつしやるの。」
「馬鹿な事言つちや怒りますよ。」
「私あなたに怒られてもいゝわホ、、、、。」
「あなたはなかなか食へないのね。」
「ホ、、、、お轉婆娘つてこんな者よ。」
「自稱お轉婆娘、參りましたね。」
Mは手を拍つた。長い廊下を走つて來る女中の足音がきこえる。
「出ませうね、此所を。」
「ハイ。」
勘定を濟ませて外へ出た。二人は肩を並べてすれつすれつ西へ京極の通に出た。
南へ下りると四條の電車道である。都おどりの串團子の提燈が花見小路の入口に景氣

よく並んでブラ下つて居る。セセッション式の四條の大橋は兩側とも行きかふ人で黑くなつて居る。
「大分に長くアスコに居ましたね。」
「いつ時間がたつたのか、知らなかつてよ。」
「都おどりも見る氣がしないわね。」
「ソウですね。ホントに今日は面白かつたのね！」
石段下停留所まで來ると北行が來た。二人は飛びのつてしまつた。
熊野神社前のカドを曲つた車車は方向を西に向けて丸太町を走つた。
「私塔の段までお送り致しませう。」
「ソレはいけないわ。デモ、ホ、、、、。」
「何ですか。」
「……」
電車は寺町丸太町で乘り換へた。北の方御所の東を走つて寺町頭の終點についた時

は春雨がしとしとと降り出した。

「大した事はあるまい。」

「之位ならば……ね。」

「二三町しかない。デハ此所でお別れ致しませう。」

「ホントに有難う御座いました。デハ、キット又來てくださいよ、いつ來て被下るの。」

「いつつて確定は出來ないのですよ。ガ又お目にかゝりませうね。」

「ホントにですよ。」

「ホントに。」

「デハ失禮。」

「デハ。」

Mは終點にある下り電車に飛び乗つた。千本丸太町の交叉點で下車した時には、パッと一時に電車通に電燈がついた。少しまつと南行七條が來た。車庫前を通つて七條大宮で下車して車を命じた。

歸るなり洋服を脱いで無雜作に押入れになげ込むと、机の前にドンと尻を下した。

「本が何だ、金が何だ、勉強が何だ、何だ。チエッ、藝術が何だ、文學が何だ、戀だ戀だ。」彼は獨りつぶやいた。

本願寺の方に當つて鐘の音が二つ三つひゞいた。

毎晩々々、單調な音樂を奏して神や佛に祈をさゝげる安價な宗教信者が戀しくなつて來た。偶像を拜してわけの解らぬ儀式や音樂に身命をさゝげて居る無智無學の徒は幸福である。學問をすればする程その人間は不幸である。出來得るならば藝術は理解したくない。學問もしたくない。凡人に生れて來たかつた。少し學問をし、藝術を理解しただけで自分の心はいつも淋しい。不滿が次から次へと續く、嗚呼己は生れて來なかつたら良かつた。

Mは障子を一枚開けてホッと一息ついた。

「心空しくあこがれし我胸、
君がほゝゑみは風にまぎれて、

青き草葉の窓に香る、
焔に飛び込む蟲のあはれにも似ずや、
我胸は、嗚呼我胸は破れしか否か、
いかに戀しかるべき君よ。」

彼は大きな聲でうなつた。

押入れから蒲團を引ずり出すとムクムクともぐり込んだ。萬感胸にせまつてなかなかに寢られぬ。己は何故こんなに頭がイライラするんだらう。天井を睨みつけて彼自身に問ふて見た。一日中の強い印象が次から次へと繪卷物を廣げて行く樣に頭の奥深く殘像となつて現れてくる。まん中から七分三分に分けた艶々しい髪の中に、翡翠の簪、落ちかゝつた樣に結つた髪をかき上げた拍子に見えた白い美しい柔かさうな肉のタップリした手。

「己はS子さんに戀して居るんだらうか？。」

彼は思はず自分に振り返つてみた。

「己はS子さんを戀して居るんだらうか？。」

彼は再びつぶやいた。

「己はS子さんの何所に戀して居るんだらう。髪の艶々しさか、手の美しさか、肉附きか、あゝ苦しい。」

と彼は蒲團の中で唸つた。

ムクムクと起きて電燈のネヂを捻つた。ト書齋も額も書物も何もかもが暗に飲まれてしまつた。矢張り苦しい。

「果して戀は罪惡なんだらうか？。」

「己が若しS子さんに戀して居たとする。ソシてソレをば一言もS子さんに打ち明けずに置く。ソレは果して正しい考なんだらうか。ドウすれば道德なんだ。如何すればいゝんだ。嗚呼己はドウすれば良いんだ。嗚呼己は、己の此の小さな胸の悶へはどうすれば良いんだらうか。」

戀の焔は無遠慮にMの心を燒きつくした。敎育者が何だ、藝術が何だ、あゝ戀だ。

Mの頭の右から左へキューピットの矢に打ち込まれた様に全身が強くひきしまつて來た。頭は亂れ切つて居る。胸は燃えて居る。手先や足先は丁度感電でもした様に打ちふるへて居る。あゝ己はS子さんに感電したのだらうか。己は今殺されかゝつて居る。彼は蒲團を蹴つて起き上つた。ソシて兩手を合して拜した。「神よ。」兩手には涙が一杯になつて居た。

書齋の時計は十時を打つた。十一時、十二時と、時のしじまはかくして流れ流れて行く。Mの胸に燃ゆる焰は刻一刻と其の方を增して來た。命までも燒き盡す程に燃えに燃えて來た。勞れ切つた頭は次第々々に冴えて來た。電燈を消した暗の中に、幻の様に、薄運なりし半生の回顧が次から次へと展開して來た。

× × × × × × ×

一三　鑵詰教育

現今の教育は實に鑵詰の様だ。詰めて詰めて詰め込むんだ。詰め込んだら良いと思

つて居るんだ。暗記と言ふ事が教育の全部なんだ。暗記してさへ居れば教育は能事だと思つて居るんだ。頭からドシドシ詰め込んで行くんだ。暗記が教育の目的なんだ。丁度鑵詰の様だ。

私は此の鑵詰式の教育が最もよくないと思ふ。何から何まで答案と言ふものに書かせて見る。ソシて採點とやら言ふ事をやる。人間の價値を點數と言ふ數字で以て現はして見ようとする。私は之が一番いけない事だと思ふのだ。人間を教育するんだ。ソノ教育と言ふ事の目的は決して試驗する事でもなければ採點する事でもない。教育は人間を作る事である。何所の學校でも學期末や學年末になると出缺の調査や答案の調査で教育も何もあつたものでない。兒童を遊ばせて置いて先生は勝手に採點ばかりやつて居る。所がソノ採點と言ふ器用な事をする先生達に一歩深く立ち入つて、採點とは如何なる目的にやと聞いて見るとテンとおわかりにならぬ。採點と言ふ様な事は一體出來る事なんだらうか。私は不思議でならない。ソンな器用な先生達が集つて居るから日本の教育も進まないんだ。丁度學校と言ふ所は採點をする所なりと言つた方が

良いと思ふ。採點なんかは教育の目的でもなければ副目的でもない。

何所の學校を參觀しても兒童の成績てふものがあつて參觀人の前へ鼻高で見せびらかして居る。ソレが眞に兒童の作であれば良いとして、大部分は教師の御手傳になつたものばかり。子供七分に教師三分位ならまだ良いとして、子供三分に教師七分の成績品である。私は何れの學校を參觀して見ても、兒童の成績品を出される度に、「何と此所の學校の先生は下手な成績品しか作らないな、」と思つて居る。私は兒童の成績だとて出されるものを見て、いつも先生のだと思つて居る。假令一寸も手が入れてないとしても子供の心理で出來た樣なものは一つもないんだからたまらぬ。又人が知らぬかと思つてかソンなものを鼻を高くして出されると氣分が惡くなつてしまつて參觀しない內から學校の內部の貧弱がわかる。

自由畫と言ふものが大分に理解されて來た樣だ。教育の爲にまことによろこばしい事だ。私は自由畫と言ふものを以て小學校の圖畫科の生命としたいと思ふ。ソシて自由畫を教育界に盛にした山本氏や大阪朝日新聞社に感謝したい。總てが自由畫式にや

らなくちや駄目だ。所が圖畫は大體自由畫に傾き出したが其他の學科も總て此の自由畫式にやらなければならぬ。私は他の學科を鑵詰式にして置いて。只圖畫だけを自由畫々々々と叫んで居る教育者が可愛想でならぬ。

何所の學校も應接の間や校長室と言つた樣な所では隨分に美しうして金も入れてあるが、教室の殺風景と言つたら實にソレはなつて居ない。審美教育だの感情教育だのと言ふものはソンな殺風景な所で出來るものではないんだ。小學校の先生は子供が一寸高價なものを持つて居るとスグに節儉と言ふおきまりの校訓を持ち出す。私は決して奢をすゝむる者ではないが、或る程度までは之を許容すべきであると信ずる。即ち審美教育とは藝術教育である。藝術は高貴なものである。何でもかでも節儉と言ふ定理の樣なものに當てはまるべきものでは決してないと言ふ事を知つて居てほしい。

例を引くまでもない事だが、個人の家でもお客の間に額がなくとも良い。掛圖がなくともすむ。額や掛圖がなくともお客をするのに何の不便もなく、ソノ樣なものがないからと言つてお客が出來ないと言ふ事はない筈である。けれども何となく額や掛圖

に依て客間が高尚に見える上に、主人のノーブルな所がうかゞはれる。路地裏の長屋生活をして居た時代には床に掛圖はなく、一枚の額も掛けるべく生活に餘裕はなかつたが、少し金でも出來るとすぐに掛圖をかけたり花瓶に花をいけたりする。之は人間の本性であつて誠に有難い神のたまものなんだ。ソコが人間と他の動物とちがふ貴族的な所があるんだ。――私の此所に言ふ貴族的とか言ふ事は意味を取りちがへない樣にしてほしい。平民に對する貴族と言ふ樣な事とはちがふ。――人は生活をして行き度いと考へる。之が他の動物とちがふ。他の動物は生きて行き度いと言ふ生存慾をもつて居るが生活して行き度いと言ふ生活慾はないんだ。私はいつも生活と「生きて行く事」とを別々に考へる。デ只生きて行くと言ふ事は生活すると言ふ事とはちがふんだデ藝術と言ふ事は此所に起原を發して居ると思ふ。――私の考は極通俗的である。科學的に考へて今少し詳細に書き度いと思ふが、ソレは他日にゆづる事とする。――例へば子供が美術的に出來た高價な筆入を購つたとすると、若し此の筆入をモット安くても美術的でなくてもよく用は足し得るのであるが、一方藝術的の觀賞と言ふ方

面から言ふと確に高價な美術的の筆入の方が教育的である。カラして若し此の子供の家庭が此の高價な筆入を購ふに十分であるならば、高價な藝術的價値のあるもの丶方が教育的である。更に藝術的の筆入が高價でなかつた場合は更に有難い事だ。父兄が雜記帳などを子供に購ふ場合の如き、雜記帳の表紙の繪畫や裝釘などに十分なる注意を要すると思ふ。何でも良いから書けさへすれば可成安價なのを撰擇するが如きは誤つた考である。子供の三度の食事に際してもス丶ケた樣な食事場所で只口の中へかき込むだけでは生きて行く目的の爲の食事ならばい丶として、出來る事ならお客の間まで持つて行つて、たとへソレがあまり御馳走でなくても家族が打ちそろつて食事をすると言ふ事が良いんだ。何もお客の間で食事をしてはいけない事はない。家族の食堂には十分に美しくした客間が良い。但し食堂としてふさはしい間があればソレに越した事はない。此の點から言ふと常に立派な家に生活して居る子供は周圍の刺戟だけでゞも藝術的審美的の教養が自然に出來ると思ふ。

私は學校でも常に子供の使用する間は十分に――經費のゆるす限り――審美的にし

て置く必要があると思ふ。小學校の先生は圖畫は畫かせ唱歌は歌はさなければ審美教育は出來ないもの丶樣に考へて居るが之は困つたものである。審美教育は子供が自發的に教へを受けたがる樣になれば教へてよいが、必らずしも圖を畫かせたり、唱歌を歌はせたりしなければ絕對に出來ないと言ふものではないから、歌を唱はせるも良い圖畫を畫かせるのもよいが、更に圖畫教室には美しい子供の悅ぶ樣な繪や名畫を掛けて置いて之を觀賞せしむる必要があると思ふ。泰西名畫の復製は隨分に澤山出來て居るからソレ等の內最も名のあるもの、子供の教育上價値あるものなどをば撰擇して之を觀賞せしむるのである。尙又圖畫のみならず地理や歷史も其の通りである。

少しも飾りなき教室で唱歌を唱はせるなどは最も考へのないやり方なのである。私はあちらこちらの學校を參觀して圖畫教室や唱歌教室に十分なる飾のなき學校を見る時、困つたものだなと思ふ。私は何所の學校へ行つてみても圖畫や唱歌の教室が他の教室と比較にならぬ場所にソレは殺風景に設けられてあるのを見て其の學校の先生達の心の中がよくわかると思ふ。私は之等の事については別に著述して置いたからソレ

にゆづつて置く事とするが、要するに現代の小學校はあまりに物質教科重要主義に傾きすぎて居ると思ふ。之では佛作つて靈入れずになるから土偶を教養して居る樣なものである。

私は現代の教育は鑵詰式であると思ふ。少しも味がないのだ。食物でも煑て食ふのと燒いて食ふのと生で食ふのとは味が頗るちがつて來る。又鑵詰にしたものを食ふのは大分に味が落ちる。私は食物を煑て食ふと言ふ事が一番に不味いと思ふ。但し煑なければ食へないものは別であるが、煑ると言ふよりも燒く方が味がよい。燒くよりも生の方が更に味はよい筈のものである。私は教育上煑たり燒いたりしない生の食物を食はせてほしいと思ふ。私は之について大いに說をなしたいが今は紙面が許さぬから略するが、教育と言ふものを煑ない樣に燒かない樣に又鑵詰にしない樣にして子供に食はせてもらい度いものだと思ふ。

次に私の述べたいのは臭い物には蓋をして通る教育である。知らす事の出來ぬものと知らさなければならぬものとの區別のある教育である。絕對に知らしむべからず式

の教育は至つてよくないと思ふ。かくして子供の本性を殺してしまつて居るのである私は之について從來からは行はれて居なかつたが此頃になつて識者の注意を引き來る樣になつた性的教育はよい例だと思ふ。之は一例であるが決して知らして惡いものは世の中に決して一つもない事である。私の近所の娘の子で本年女學校の一年生であるが、私に性的質問を發した事があつた。ソノ子供は大變によく學科も出來るし勝氣な方でドチラかと言へばおませの方だが「先生私のお友達が子供の生れるのは男女の交接だとおつしやいましたが事實でせうか。」と眞險になつて問ふのである。子供の生れると言ふ事實や人間には男女の別のある事や。お互が生理的に異なつたものだなど言ふ點に至つては女學校の一年生とも成つた者はよく知つて居る。尙又子供は男子が決して生まずに女子が生むものだなと言ふ點もよく知つて居る。ソシて交接と言ふ今迄聞いた事の決してない事實を知つて驚いて私に聞いたのである。私は此の時「然り」と答へた。ソシて此の婚に十分に得心の出來る樣に醫學上の書物なんかを見せて其の實際の事實を申聞かせた。初めの內は變な顏をして聞いたが後ほどになつて偉大なる眞

理を發見したように悅んだ。私は眞劍になつて申きかせた。デ從來性を亂用した人間の歷史の慣性に依つて秘密にされて居たものだが現在では追々と人間の頭も進步して來て之等の事柄を秘密にすると言ふ事がよくないと思ひ考へて學校でゞも性教育をする所もあると言ふ詳細な點に至るまで申しきかせ、尙性の亂用はおそろしいものだから十分につゝしめと言ふ事と佛教上の話などを持ち來つて說明を加へてやつた。その子供は大變に悅んでよく解りました。お話を承つて私等が今後十分に注意しなければならない點もよく解りましたと言つた。私は臭いものに蓋をして通る教育は決してよくないと思ふ。私は性についての教育も別にものしたから他日讀者の貴覽に供する事が出來ると思つて居るが、要するに子供に知らせて惡いと言ふものは決して森羅萬象中に一もない事と信ずる者である。私は由來秘密を守らぬ者である。私は一寸の妥協も許さぬ男である。人間に秘密と言ふものはない筈である。私は此の秘密を守る樣な教育は眞の教育でないと思ふ。惡い倫理も教へて價値ありとするものである。先生は大便も小便もしない者の如くに神聖化して被教育者に向ふのは以ての外惡い事であ

る。先生も生徒も等しく人間であると言ふ事を知らしめるのである。お互が同等なものであるてふ事を知らせるのである。少しも先生をば神聖化する必要はないんだ。ソシてソンな事で教育者の價値の下る樣な事では眞に教育者のねうちがない者であらねばならぬ。

私は本書の脱稿を急ぐから種々な事を同時に不系統に持ち出す事を讀者は許してもらい度い。私は次に尙二三言はなければならぬ事がある。

子供と言ふものはソレは至つて正直なものである無垢なものである。私は現代の教育者が今少し無垢になつて眞劍になつて、眞の教育的理想に向つて突進してほしい者だと思ふ。私は現代の教育を今一歩進めるのは教育者自身が今少し無垢になる事だと思ふ。若年寄の樣な教育者が何人ウヂョウヂョして居たつて何にもならぬのである。所が教育者には此の若年寄式の人間が多いのには實際驚く。私は今少し教育者が年寄臭から離れて若かりし昔の內省によつて子供の世界に生きてほしい事である。多くの教育者が何だか悟りを開いた樣な開かぬ樣な風な態度で居る事は最もよくない事なの

だ。私の知つて居る男に私立小學校へ轉じた男がある。何だか禪の悟りを開いた樣な事を叫んだりして居る男である。ケレ共彼の根本的の事を考へるとソノ叫びが無價値なのである。俸級の上る事や校長になつて見度い樣な野心を持て何程叫んだつて何になる者か。モット根本的にやれ。位置も金も名譽も捨てゝ根本的にやれ。眞理の爲なら首になる位は何でもない事だ。生命を賭してやれ、ソレが教育の最も大切な所なのだ。眞の教育者は叫ぶ事と實行する事とは別々ぢやないんだ。日本人にはドウも惡い性がある。エライ人とか高位高官の人にはペコペコ頭を下げるが自分より一歩下の方に居る者にはエラ相にして居る。頭のないくせにエラガル、此のエラガルと言ふ事は教育者には禁物だ。私は乞食とでも丁寧に話す者でなければ眞の教育者でないと思ふ僅のヘツクリを貯金してエラガル奴の多い世の中だ。私は自分自身が乞食になつてもやる事だけはやるんだ。言ふ事だけは言ふんだ。其の覺悟がなくちや教育なんか出來るものでないんだ。

教育者は是非教育書を讀まんければならぬ。しかし教育書ばかり讀んで居る教育者

は駄目である。小説も讀むんだ。藝術も味ふんだ。遊ぶ事も十分にやるんだ。社會の裏面へもよく頭を入れて來る事だ。藝者遊びも良いし娼婦と話す事もよい。又美しい娘があれば戀しても決して恥でも何でもない。只自分にやる事は生命を賭してやれ、ソシて完成を期せ。ソシて社會の裏面を見よ。ソシて教育と言ふ仕事がソンなに教室や校庭でのみ出來るのではない事を悟れ。

× × × × × × ×

私は之で本書を稿了する事とする。實際に右の樣な事を自分の著書として出版して良いものか悪いものかも私にはわからぬ。私は只私の內心の要求を筆にあらはした迄である。之を出版すると否とは著者に關係はない。著者と言ふ人間はペンと紙とで食つて居るものなのだ。カラして私がこの樣な書物を書いたのも或はその爲だと思ふ人もあるだらう。ガ其の通りに思つてくれても何等私はかまはぬ。只何かなしに筆を取つたものとちがふから其點だけは承知して居てほしいものだ。

實を言へば此の書は前後二篇にして、前篇には殺されて居る教育者、後篇には殺されて居る被教育者、附錄として創作的のものを載せる豫定であつた。所が私が第二篇に書かうとした殺されて居る被教育者と言ふ論は到底本書の如き小冊子にはまとめられなくなつた。ト言ふのは頗る大問題だからであるカラして、本書も大部分は割愛して之だけにまとめてしまつた。若し私に時間と身體が許すならば「續殺人的教育」とでも言つた樣な著書にまとめたいと思つて居る。本書には系統がないと言ふ特色がある。私は大體に系統立つたものは嫌ひである。ソレは私の本性なのだから致し方がないが、此の不系統な中に系統のあるのは著者の誇りとする所なのである。

私は之から序文と目錄とを今夜中に完成しなければならぬ。ソシて明日は之を書肆の手へ渡さなければならぬからして、內容を反覆する時間がない。私は本書中にドンな事を書いたか忘れてしまつた。椅子によつて書いた所もあり、寢所の中で書いた所もある。料理店の座敷で書いた所もあり。友人の書齋に入つて書いた所もある。深夜ハネ起きて書いた所もあり、美人と雜談中に書いた所もある。私はドンな際にも筆を離した事はない。電車の中で書いたり汽車の中で書いたりした所もある。ソウした私

の雜記帳はつもりつもつて本箱に入らぬ程もあるが本書の其の内の一部分である。三百頁位は書かうと約束したらか丁度三百頁にはならぬが大體之で私は約束を果す事になつた。實はモット書き度いんだが私は勞れて來た。あまりに敎育を馬鹿にすべく容易であるから何程馬鹿口を弄しても盡きないのである。ソレ程に現今の敎育は不振なのである。

私は此頃世の中の事が總てあまりに馬鹿げて居る事の樣に考へる。私は世の中に厭いて來た。オソラク人間と言ふ商賣にも厭いて來たのかも知れない。私は金も欲しない。成功も欲しない。名譽も欲しない。總てのものを欲しないが只一つ食ふ事と寢る事とだけは欲する。私は食ふ事だけは欲する。カラしてまだまだ死にはすまいと思つて居る。私は酒にも大分に厭いて來た。ケレ共時々は大に飲む。私は女にも大分に厭いた。三十才に滿たぬ私が女に厭くとはあまりに元氣がなさすぎる樣だが、私の氣に入る樣な女は私のせまい見地と範圍に於ては尙見つからぬ。故に私は婦人問題の研究もして居る。

私は何故もつと大きな仕事が出來ないだらうと自分で自分を厭ほしく思つて居る。しかし今の所では理想も何もが實現され想にもない。下宿の二階の八疊と六疊の間から見た自然は先づ之位なものかと思ふ。但し私は學生ではない事を承知して居てほしい。之でも貧弱ながら敎育者のつもりだから、何卒本書も敎育者自身の叫びであると思つて置いてほしい。

私は大家の序文とか言ふものが大のきらいである。カラして私の前著は總て私の自序に限る。私は私に最も理想と思ふ女が發見出來ぬ樣に、私は私の眞に崇拜する敎育人格者も未だ不幸にして發見し得ない。故に若しソノ樣な敎育者が發見出來たら直ちに其人に序文をたのむ事とする。但しソレが私の氣隨かも知れない。しかし私は私の氣隨が最もたのもしいから益々モット氣隨者になるつもりである。

私は私の前著やソレカラ本書の如きを讀んでくださる方々に感謝したい。私の書いた樣なものにも讀者があるかと思ふと私はうれしくてならぬ。ソレだけ私には著者としての責任がある。カラして如何なる場合も私は決して無責任な事は書いて居ないつ

もりだ。何だか讀者が馬鹿らしいと思つて讀んで被る場所も私には之で十分に眞劍なんだから致し方がない。デ本書中の一言一句なりと若し御質問でもくだされば十分に私には說明の勞を取るべき責任がある。兎に角私の書いたものを讀んで被下つたと言ふ事は何だか私と讀者の間に緣があるものと信ずる。著者に對して此の緣を捨てない樣にしてもらい度い。之はチトあつかましい話かも知れない。私は日本の國に於ける著者と讀者と言ふものがあまりに緣を輕く見て居るのではあるまいかと思ふ。例へば讀者は或る著者の書いたものを讀んでも讀みすてゞある。何等其の書物について著者に自分の感想を述べるなり、又は批評するなり、質問をするなりてふ樣な事は更にないのである。又著者自身としても質問や面會を謝絕してみたり、奧附には住所も入れないで平氣で居る。ツマリ讀者に對して不親切である。私は日本の書物の著者や讀者が此の何等かの緣をたよつて十分に打ちとけなければならないものをと思ふ。或る經濟論者の著書を見た時「私に面會を求めらるゝ方が澤山あるが私は面會を御斷りする又私に手紙や葉書を貰つても御返辭は出來ない。」と言つた樣な事を書いて居たのを見

た。ソンな男の著書は一切讀んでやらない方が良い。ソンな不親切不道德な事があるか。之と言ふのは日本の書物の著者は矢張り日本人の性癖をもつて居るからである。お互に壁を置いて話すからいけない。乞食とでも話する者でなければならぬ。乞食でも矢張り日本人であるから、我々と等しく神代より血を享けた祖先の子孫である。偉大なる經濟論者も乞食も等しいのである。口に經濟論をとなへ實際には日本人お互が壁を置いて話す事すらせぬ男こそ眞の學者人格者ではないのである。

私は現代の此の殺人的教育の現狀は容易に破壞する事が出來ないものだと思ふ。デ私が如何に私一人として喋り立て叫び立てゝも駄目である。支那は亡國的の國である今後ドンなに發展するかしないかは私にはわからぬ。私はソンな事を豫言する樣な神通力や千里眼はないが今の所では亡國的の狀態である。ソノ支那人のやつて居る事や性質をしらべて見ると良い。私は日本人と支那人とよく似た所があると思ふ。金でも少しためるとエラ想にする事や、官僚が橫暴を極める事や、お互が壁を置いて話す事などはよく似て居る。其他顏の色や髮の毛などは無論似て居るとして、何だか私は支

那人の方がエライ所がありはすまいかと思ふ事すらある。世界强國の一つの末席をけがした日本人も、まだまだ西洋人の様にエラクはなれないものと見える。私は殺人敎育の終りに、日本の國民に小島國的の小さな至つて開けない性質を改めてほしいと思ふ。お互がお互として日本人なる以上は乞食であらうが大學の敎授であらうが、華族であると平民であるとの論なく、金持と貧乏、子供と大人、男と女の別なくお互がもつともつと仲よくなつてお互に壁を作つて交際する様な事のない様にしてほしいものだと思ふ。サすれば工場主と勞働者、資本家と職工と言つた風な別けへだてのない美しい神の世界か子供の樂園の様な、眞に住み心知の良い世界が出現するであらうと思ふ。しかし日本の現狀では到底近い内には望まれない事だ。

私は本書が出版になる時分には次の草稿に取りかゝつて居るだらうと思ふが、ソレは敎育的のものでやゝ間接的なものである。その時分になると氣候も大分に暖くなつて來るから筆を持つにも容易である。私の現在の仕事は一日に二時間か三時間程の本職と二三の內職との他は生活上の職業はない。私は一日合計五時間位はピアノやオルガンを相手に生徒を敎へ又は個人の別莊なんかでピアノの指導をして居る。デ比較的筆取る時間である。私の様な馬鹿者に時間の餘裕を與へると言ふとドンな馬鹿げた芝居を演ずるかも知れない。しかし私は私のする事はドンな馬鹿げた事だと諸君が思はれても私には先にも申す通り眞劍なんだ。カラシテ本書の內容の如き馬鹿げた事も書くのであるが、私は尙々馬鹿げた事を今後も書く豫定で居るから、何卒御愛讀にあづかり度いものだと思ふ。

私は右にも申し述べた通り本職は音樂である。音樂家が歷史や敎育の事を書くと言ふ事も一寸面白いと思ふ。私は趣味として音樂をやり、職業として生活をさゝへる爲に音樂をやるんだから、本質上は私も著述家であると思ふ。私はしかし音樂と言ふ本職も敎育と言ふ本職も何時すてるかも知れない。假令棄てゝしまつても私は私の一生を通じておそらく私の體驗上音樂や敎育と離るゝ事は出來ないから、私は又我ままな氣隨を筆に書きあらはすかも知れない。

私は殺人的敎育と言ふ表題の書物の中にクドクドしく自己の考を氣隨に比較的長

く書いた。普通の著書であればこんな事は書かない。ダガ私は序文も今少し長くかくつもりである。ト言ふのは讀者が私と言ふ人間を知つて被下る上から私は之位な事を書いて置いても良いと思つたから書く事にした。實際書物を讀む時に著者が一體ドンな性質の、ドンな職業の、ソシてどんな考で、何才位な、など言ふ事は知つて居ると否とで大變に共鳴がちがふものなんだから、又著書に寫眞でも入れて置くと如何に美男子かと言ふ事もよく解るから到つて必要な事だと思つたから少々長くなつたが書いて置いた。只寫眞は不幸にして諸君の前に提出致す程の容色を持て居ないから失禮致す事にした。しかし年は若い男だとだけは御承知をねがひ度い。自分自身としてもあまり老人ではないと思つて居る。三十才に足らぬ事數年、私には出版したものと筐底に藏する未刊のものとを合せて六つ程の著書があるが、私は尙々書いて行くつもりで居る。ソシて私が滿三十才になつたら紀念の爲最も眞劍な人生問題にふれたものを出す豫定で居る。私が滿二十才の記念として作つたものに原稿紙三千四百枚程のものがあるが、之は只今でも出版を躊躇して居る、私がモット人間味をさとつて來たら出す

事とするつもりで居る。

今後も私に最も望む希望は人間味と言ふものである。私は今後此の方面に全力を注いで見度いと思ふ。デ或は世人からは墮落して居るなど思はれる樣な事もあらうとは思ふが、私は實際世の中の一番底に落ちて見たい樣な氣がする。私の現在がすでに世の中のドン底かも知れないが、自分は尙々ドン底がある樣にも思ふ。私は此の世の中のドン底まで洋行して來たいと思つて居るが或は私の一生の內には不可能かも知れない。私は世の中の人からエライ男だとか善人だとか呼ばれ度くはない。實際に眞の敎育者は此のドン底まで一度洋行した人でなくては駄目である。米國や英國や獨佛あたりに洋行して博士にしてもらつてエラばつて居る敎育者が日本國中に何人ウヂヨウヂヨして居たつて敎育は決して一寸も進む者ではない。私は眞の敎育者は社會のドン底まで一度洋行した人でなければならぬと思ふ。私は滿天下の敎育者に是非とも社會のドン底まで洋行してほしいから此所におすゝめ致して置く。

私は今は何人も私の仕事を美しい面白い仕事だと言ふてくれる。ガ私はモット醜い

モッと面白くない仕事もやつて見るつもりで居る。ソシて假令世の中の人から私が墮落して居ると見てくれても決して恥とはしない。私は現代の非論理な道德や、因習的の慣習によつて私自身を如何に批評してくれたつて何とも思はぬし恥ともしない。私は是非とも此の非論理な道德や慣習から脫黨したいと思つて居るし、打ちこはしてしまひ度い樣にも思ふ。否とよ私の將來は、オソらく私の一生を通じて偶像の如き現代の道德や宗教や因習や風俗をブチこはしてしまふ事に努力するであらう事を此所に豫告致して本書を終る事とする。

現今の殺人的教育 終

現今の殺人的教育
定價金貳圓六拾錢

大正十年三月七日印刷
大正十年三月十二日發行

著者 京都市上京區神樂坂通り吉田中道西入中町 栗山周一
發行者 東京市神田區錦町一丁目十六番地 宮下軍平
印刷者 東京市芝區愛宕町二丁目十五番地 正木靖
印刷所 東京市芝區愛宕町二丁目十五番地 三賞舍印刷所

發行所 東京市神田區錦町一の十六 振替東京第三四〇九番 二松堂書店 電話神田二四七八番

不許複製

（同じ著者に依りて）

最近史潮 **歴史教育の根本的革新論** 既刊

著者の歴史教育に對する根本的改造論（大同館出版）

現今の殺人的教育 既刊

著者が現代教育に於ける具體的實例の批判（二松堂出版）

藝術教育としての音 未刊

藝術教育としての色 未刊

右二書は著者が藝術教育論

東京神田錦町一の十六
振替東京第三四〇九番
電話神田二四七八番

二松堂書店發行圖書目錄

大正十年一月改正

書名	著譯者	冊數	定價	郵稅	內容の大意
趣味と研究とに基ける 佛様の戸籍調べ	醍醐惠端	一	一円五〇	〇八	佛教界空前の奇書。佛祖百餘佛の親子兄弟は元より品行性質等に至る迄遺憾無くサラケ出し奇拔で滑稽。
興味と教訓とに基ける 神様の戸籍調べ	二酉洞學人 日本の部	一	一円五〇	〇八	本書は吾々祖先たる神漢の御父母兄弟御夫婦の關係御性質其神々の逸話傳說を面白く記したもの日本人は是非共讀まねばならぬ第一の書である。
興味と教訓とに基ける 神様の戸籍調べ	二酉洞學人 外國の部	一	一円五〇	〇八	外國之部に於ては益々滑稽で奇拔一讀おへその宙返りを演ずる破天荒の快著である。
興味と信仰とに基ける 神佛の御利益調べ	西川光二郎	一	一円五〇	〇八	苟も神佛の前に立て禮拜する者は何人も一讀せよ本書は神社佛閣を中心として篤信者の間に起りし靈驗御利やくの物語を蒐集したもので讀んで小說よりも面白い。
皇國の精華 武士道の粹 赤穂 義士の戸籍調べ	醍醐惠端	一	一円五〇	〇八	世にありふれたる義士銘々傳や忠臣藏の本などで見られぬ珍書赤穂四十七士の親子兄弟は元より素行性質等に至迄悉くサラケ出し小說よりも面白く爲になり奇拔で滑稽
天誅を目的とせる 不義士の戸籍調べ	醍醐惠端	一	一円五〇	〇八	大野九郎兵衛腰拔高田軍兵衛以下百餘人不義不忠の惡總武士著者の嚴誅にかゝり目を白黑地獄の閻魔も本書を根據として焦熱地獄と判決したそうである。
趣味と研究に基ける 花も實もある 俠客の戸籍調べ	醍醐惠端	一	一円五〇	〇八	花川戸助六、蟹藏院長兵衛、國定忠治其他六七十名スツパリと戸籍を洗ひ出されて丸裸、皮肉で奇拔で滑稽如何なる苦蟲でも腹の皮をよらすことであらう。
趣味と研究に基ける 名僧の戸籍調べ	大橋戒俊	二	一円五〇	〇八	往古は佛陀より近代は釋宗演、日置默仙、石川素童に至る總て一百人滑稽あり諷刺あり興味津々として湧く。

趣味と修養とに基ける	偉人の戸籍調べ	上卷	多田正敏	一
趣味と修養とに基ける	偉人の戸籍調べ	下卷	多田丘敏	二
	淫神邪教と迷信		横山滝星	一
	邪蘇教の日本的研究		木村鷹太郎	一
精神療法	病は氣から		清水芳洲	一
迷信打破	所謂心靈現象の原理及方法	心靈術の正體曝露	修靈鍛身會長 藤田西湖	一
大正	式辭と演說		大町桂月校	一
人に好かれる	談話術		樋口麗陽	一
	最新雄辯術		尾崎行雄校	一
	新作詩自在		土居香國校閲 井上靈山著	一
	書畫贋物語		湯淺半月	一
	書畫骨董あき目くら		足立欽一	一

一五〇	八〇	幾多の史實、得難き冥途通信、火の如き情話、お臍の宙返る諧謔逸話、寸鐵人を刺す諷刺一讀泣き笑ひ怒るの三上戸となる、吾が國偉人の粹二十餘人、欧米支那の萃三十人が赤裸々なる面目は此一書によつて躍如たり、殊に下卷には人氣役者のマルクス、クロポトキン、勞働の神シヤ伯等を納む。
一五〇	八〇	幾多の信徒を欺瞞し來たる生殖器崇拜の淫神、淫猥亂れなる邪教大本教を始め全部遺慮なく赤裸々にサラケ出し小說より面白い中に該博なる研究がある見よ空前の快著
二五〇	一〇	著者獨得の研究と新材料とを以て研究し其結果、耶蘇教は日本民族から出でたる事を證明された實に全世界を驚動すべき教界破天荒の研究である。
一五〇	八〇	人生僅か五十年泣いて暮すも五十年笑ふて暮すも五十年泣いて暮すも笑ふのも心一つの置どころ。此意味に於いて本書を一讀せば、たいていの病氣は治る。
一〇〇	六〇	實に不可思議なる人體に太針を通し又は火を食ひ、熱湯に手を入れ、刀の上を歩き其他幾多の實驗寫眞十八葉を挿入して平易に說明せる珍書。
一八〇	一二	各種の會合に必要なる式辭演說答辯等五百餘題を網羅し如何なる場合に臨みても應用自由自在ならしむ僞書あり注意。
一二〇	八〇	談話の上手下手は其人一生の運命を支配す、談話術の偉力は智力金力も遠く及ばず、本書は其秘訣を說く。
一五〇	八〇	演說を如何なる樣にせば聽衆の腦裡に印象せしむるかを平易に說述せるもの。
二八〇	一二	凡そ詩學に關する智識と材料とを本書に一括し一讀自由自在に作り得らるゝ特色を有す。
一五〇	八〇	美術の眞相を解剖し眞の鑑定法を敎へ批評眼を開發せしむ、斯界に志ある者は是非一讀すべし。
一八〇	八〇	書畫骨董品の僞物を眞書しやかな辯舌で滿着しようと計る人達に對し是非知て置かればならぬ金科玉條である。

增訂	六朝書道論		中村不折 井上靈山	一
	實行草字鑑		前田默鳳	一
	新書道之研究		木村嘯石	二 上一五〇 下一五〇 合二八〇 各一三
	草書要鑑		王羲之	一
楷行草	三體習字帖		日下部鳴鶴	一
月刊雜誌	書道及畫道		大家數十名	每月一回
	書道及畫道	合本第一		一 品切
	同合本	第二 第三		一 各一八〇
	書道及畫道	合本第四、第五 第六、第七		各二一〇 三
	文字の教へ方		後藤朝太郎	一 一八〇 三
增訂改版	普通生理衛生學	理學士 大森千藏		一 三五〇 三
現代	國民作法精義		藏田秀臣	一 一五〇 八

挿入せる不折先生秘藏の古碑法帖寫眞拓本種は千百金の價し或は金錢にて得難き寶貴何れも天下の逸品。
實用文字一萬五千餘を選び三體に分ちあらゆる各書法を示したる書界の寶典卷末にいろはの各書體を附す。
上卷楷書及行書の卷、下卷草書及假名の卷、に分ち全部習字用に適し書に上達する斯界唯一の寶典。
草書界の大權威、千變萬化の妙を盡し草書變化の極致は此一書に盡す。
先生最近の筆に成りしもの精巧なる寫眞凸版に附し肉筆と少差無き樣に勉めたる習字書中第一の書也。
斯界唯一の模範たり標準たる權威ある雜誌毎號寫眞數十種手本四頁と大家有益記事滿載、前金三ヶ月分一圓三十五錢六ヶ月分二圓六十錢一ヶ年分五圓十錢郵稅共。
月刊雜誌自一卷二號至二卷四號迄六册の合本也雜誌と雖も一時的の物に非ず書畫研究の好資料なり。
同自二卷五號至二卷十號迄六册の合本也。同自二卷十一號至三卷四號迄六册の合本也。
第四、は三卷の五號より十號迄第五、は三卷の十一號より四卷の四號迄第六は四卷五號より十號迄第七は四卷十一號より五卷四號迄各六册の合本也。
著者多年の抱負と考案とに基き文字の實際的敎授に就いて各方面より警告を與へられたる良書。
最も精密なる解剖圖を一々挿みて生理と衛生に關する事項を細大洩らさず平易に簡明に說明せる大名著。
現代の社交界に適應すべき禮儀作法を網羅し最も簡明に說述せるもの、讀むスグ役に立ち社會に立つて恥をかくの恐れなし。

文化を顧慮せる	淨土教發達の史實	醍醐惠端	二	二二〇
				文化史的管見を以て淨土教の發達せる經路を叙述せるもの精透なる史論と敬虔なる信仰とそして國民思想の變遷せる經路とは歴々眉々として本書に明かなり。
	禪の解剖	慶應義塾大學教授 日經讀山	一	二〇〇
				不立文字の禪宗、誠に不可解なり。此書はよく吾人に明快に、最も深刻に最も徹底して禪を摹示す。
韓僧の支那行脚	達磨の足跡	關清拙	一	一二〇
				今の禪僧には足も手も目も耳もある著者は達磨の末孫にして一年に亘る支那大旅行の結晶は本書である、行文奇にして妙、達磨の屁を嗅ぐ滑稽百出失策千萬。
	國譯禪宗叢書	各管長顧問 專門大家譯註	三	
				會員に非ざれば分たず。
	書畫骨董叢書	專門大家分擔執筆	三	
				會員以外に販賣せず。
元祿將軍	大奥の秘密	横井鶴城	一	一二〇
				興味あり最も怪奇なるは元祿時代にして而かも浮風天地を席捲し墮落其極に達し各自權謀術數を弄して暗躍する恰も活動寫眞を見る如し。
桃山御殿	大奥の秘密	横井鶴城	二	一二〇
				鄭太閤豪奢を極め多數の嬖妾と淫樂に耽つた裏面を素破拔き妖婦淀君の淫行等一讀アツと云ふ樣な大奥の秘密は本書に依つて始めて公開せらる。
千代田城	大奥の秘密	横井鶴城	二	一八〇
				美少年家光公、色情狂の千姫、名婦春日局、六大將軍大奥の秘密、風俗懷亂、奥女中と歌舞伎役者の淫行、造兒の讐爭、墮胎流行等の大秘密集露。
臨床應用	清水式心理療法	東京心理協會 清水芳洲	一	二八〇
				清水式心理療法は學理實際共に優秀卓拔を以て知られて居る今茲に縷々を要せず、先生半生の蘊蓄を傾倒して本書を公にせらる内容懇切平易。
誰でも容易に熟達せる	催眠施術法	清水芳洲	一	一二〇
				催眠術醫及の目的たりて何人にも熟達する樣簡易に面白く一讀催眠術とは居眠りをするよりも容易なものであることが分る。
最も進歩せる	清水式催眠法	清水芳洲	一	二二〇
				斯界の第一人者として公選せられたる著者が幾多の催眠法を敎へ特に自身が自身に催眠を施し數分時にして心神爽快となり元氣横溢す病者は持病を全治せしむる秘法。

	趣味の傳說	五十嵐力	切品	
				傳說は社會が默つて書いた歴史である而して必親展の手紙を讀む樣な味がある。
現代	都市之研究	工學博士 片岡安	一	五八〇
				都市は如何にして經營すべきか此疑問に答へたるは實に本書也精巧無比の大寫眞百餘種は各都市の實際を語る。
縮增刷訂	柔道教範	嘉納師範校閲 横山八段 大島四段合著	一	一二〇
				初心者の手ほどきより祕密奥傳に至る迄包まず隱さず悉く說明恰も手を取り敎ふるが如し、特に挿入せる諸大家の實地取組寫眞百餘個は龍戰虎鬪の活劇を演ず、眞に肉躍り骨動き手に汗するを覺えざらしむ。
	英譯柔道教範	同人	一	三五〇
				不良男子の惡戲や暴漢の侮辱の爲にあたら淑女が名譽を汚され命迄取られる事がある、本書は實地實際の場合にスグ役に立つ護身の要法を敎ゆ。
	女の護身術	横山虎夫	一	八〇
訂正再增	外來語辭典	勝屋英造	一	一八〇
				我が邦に輸入され既に邦語となつて今日盛に使用さるゝ新語壹萬餘語を選び平易に解釋せる新辭典。
獨修	大正日英新會話	英語研究會	一	五〇
				英語會話を知らざれば現代活社會に活躍する能はず本書は何人にも獨習出來最も實用的に編纂せるもの。
科學趣味	世界の奇蹟	理學博士 横山又次郎	一	一二〇
				面白き事不可思議なる事世界最大最高最長のもの等あらゆる珍らしき事實を平易談話體に寫眞を挿みて說明。
	珍らしき科學の話	工學士 杣山增人	一	一二〇
				ためになる科學の話を面白く讀ませて不知不識の間に科學の思想を與へたいと云ふ目的で著はされた書である。
入學選定	男女學校の案内と東京遊學の評判	太田英隆	一	一〇〇
				帝都のあらゆる學校を網羅し校則、入學規定試驗問題等は勿論其學校の評判を調べて入學選定の指針となす。
註訓	ポケット菜根譚	笹川臨風	二	八五
				本書は修養と處世の祕訣を說ける東洋唯一の名著にして論孟を裏面より說ける小形上製の美本なり。
農村社會問題	地主と小作人	内務省地方局 天野藤男	一	一八〇
				地主對小作將に擴爭せんとする趨勢を淘湧せり三百萬戸一千萬人の小作人と二百萬地主階級との死活興廢の大問題は本書に依つて解決せらる。

書名	著者	冊數	定價	郵稅	內容の大意
米作は斯くして増收せよ	居附兼三郎	一	二八〇	三	食糧問題の根本的解決策？米作の増收にあり如何にせば増收し得べきや、實地研究に依りて公にせられたる本書を見よ、本書の出現は國益實に二十億圓を増收せしむ。
實驗 蠶の遺傳	農學博士 外山龜太郎	一	一·二〇	〇八	蠶の遺傳に就て世界的學者として知られたる著者が多年實驗研究に成りし一大結晶なり。
藥草栽培と其研究	河南休男 龜川兼吉	一	一·四〇	〇八	藥草栽培に熱心なる著者が現在の藥局法に基きあらゆる各種を網羅し栽培法製法効用等を説明。
人糞代用 肥料自家製造法	矢崎亥八	一	一·四〇	〇八	肥料が高くて困る方の爲に只で手輕に出來あらゆる肥料に優り農產物の增收法を敎へたるもの。
最新十大副業	產業調査會	一	一·一〇	〇八	物價騰貴に驚き生活難を叫ばんより先づ自己の收入增加を計れ、本書は簡單に容易に莫大の收益法を敎へたる生活雜救濟の福音書。
信託業務の理論と實際	法學士 豐浦與七	一	一·四〇	一八	信託業務に多年經驗ある著者が主として實務取扱上の眞地よりして信託業務の理論と實際とを平易簡明に解說せられたるもの
會社批判眼 一會社內容名の見方	增島信吉	一	二·四〇	一〇	一般投資家其事業の實質を知らんとする者に是非必讀すべきなり、銀行會社の成績を調査する唯一の羅針盤である。
米相場十二ヶ月全勝秘法	林哲壹	一	二·四〇	〇八	門外不出の秘密奧傳を特に乞ふて公にせらる。本書は九星干支術と易理とを以て三百六十五日の米相場に活用し百發百中天下一品の秘書。

編輯顧問 東京高等師範學校訓導 蘆田惠之助先生 東京成蹊小學校主事 小瀨松次郎先生

月刊雜誌 毎月一回一日發行

兒童の綴方

定價一冊金二拾五錢郵稅五厘 三ヶ月分七拾五錢六ヶ月分一圓四拾五錢 一ヶ年分(十二冊)二圓八拾錢以上郵稅共

本誌は諸先生の綴方に就ての有益なる講話を始め全國兒童の綴方を滿載其他少年の和歌、俳句、笑話、自由畫、等の懸賞當選作を掲載す

新案特許 第五二四二五號

二段式參考書

諸官立學校入學試驗

書名	著者	冊數	定價	郵稅
標準作文問題答案集	二段式參考書刊行會編	一	七拾錢	〇四拾錢
標準國語新解釋法	二段式參考書刊行會編	一	七五	〇四
標準英文和譯法	二段式參考書刊行會編	一	七五	〇四
標準和文英譯法	二段式參考書刊行會編	一	七五	〇四
標準日本歷史	二段式參考書刊行會編	一	八五	〇四
標準鑛物學	二段式參考書刊行會編	一	七五	〇四
標準動物學	二段式參考書刊行會編	一	七五	〇四

以下各種續々刊行

特色

二段式參考書は未だ類を見ざる破天荒の斬新なる考案に成りしものにして上段には標準的問題を配列し下段には其解答又は解釋を例記し上段と下段とを裁斷し二冊を合綴せしもの例へば上段の試驗問題を解釋し得ざる時は其頁を其まゝにして下段何頁なり見出し得て立處に其解釋を求めらるゝと同時に應用問題を研究し得て記憶暗記に便ならしむ至便此上もなし內容又完備を盡す敢て贅せず兎に角書肆の店頭に內容の實見を乞ふ體裁優美、三六版上製、携帶至便。

書名	著譯者	冊數	定價	郵稅
大發明家と發明界の進步	瓜生廉一	一	一·五〇	一〇
豪傑快傑	田中貫太郎	切品	切品	
現代の人物觀 無遠慮に申上候	河瀨蘇北	一	一·五〇	一〇
老人より青年へ	村田保	一	一·〇〇	〇八
偉人論	山路愛山	切品		
德富蘆花の哲學	現代思潮研究會	一	一·五〇	〇八

獨逸と歐羅巴	加藤元志	一	一・五〇	〇八
社會學十回講義	樋口龍峽	品切		
社會學小史	樋口龍峽	一	一・二〇	〇六
社會學原理と應用	山崎直三	一	二・五〇	一三
神代史の新しい研究	津田左右吉	品切		
日本海上發展史（附日本海軍の發展）	足立栗園	一	二・五〇	一三
新聞及新聞記者	後藤三巴樓主人	一	五五	〇六
新俳句自在	中内蝶二	一	一・五〇	一三
演說と座談	大隈重信	品切		
北米の日本人	法學博士 末廣重雄	一	一・八〇	〇八
アキレ申候	林喜一	一	一・五〇	〇八
諸流研究 花道と茶道	松星濟理水	一	一・二〇	〇八
千里眼	竹内楠三	一	五〇	〇六
讀書作文要字鑑	木場喜一郎	一	七五	〇四
小學校算術書に關する色彩を主とせる 教師の注意	高井彌吉	一	八〇	〇六
新定畫帖教授の注意	竹内次郎 上島登	一	一・八〇	一三
新案 小學校、女學校、師範學校 色彩採集ノート	大檜蘆水	一	二五	〇三
行進遊技法精義	眞行寺吉太郎外二名	一	一・五〇	〇八
運動場の教育的施設	實際教育研究會	一	一・八〇	一三
國定讀本文章之研究	五十嵐力	品切		
國語中心 成績考査之新研究	遠藤早泉	一	七〇	〇六
机間巡視に關する新研究	實際教育研究會	一	五五	〇六
小學校補習學校 農業實習法（一名一切農業之實際）	本橋元治	品切		
尋常小學 珠算書	珠算研究會	三	各一三	〇三
化學工業品製造法	化學研究會	一	一・二〇	〇八
青年義勇團與村の指導	赤井勝次郎	一	八〇	〇六

農民教育	山崎延吉	品切		
報德と農村	二宮尊親	一	二〇	〇三
農村青年に與ふる書	蘆川克巳	一	一・二〇	〇八
實業能率增進の心理	鈴木久造	一	一・五〇	〇八
能率增進法	鈴木文治	品切		
根氣の世の中	蘆川克巳	一	一・八〇	〇八
克己實話	安田善次郎	一	一・〇〇	〇八
克己實習ノート	蘆川忠雄	一	五〇	〇四
模範小賣店の組織	佐々木十九	一	一・二〇	〇六
模範小賣店經營法	佐々木十九	一	一・二〇	〇六
實業秘訣 損して德とれ	佐々木十九	一	一・二〇	〇六
成功秘訣 新小僧讀本	佐々木十九	一	四八	〇四
最新 代數學問題正解	伊藤豐十外二名	品切		
算術應用問題正解	數學教授法研究會	一	五〇	〇四
新式商業簿記	現代實業叢書 一編	一	五〇	〇四
新式銀行簿記	同 二編 米澤商學士	一	五〇	〇四
最新商事要項	同 三編 池上商學士	一	五〇	〇四
最新商業經濟	同 四編 池上商學士	一	五〇	〇四
新式商業算術	同 五編 桐澤商學士	一	五〇	〇四
新式珠算書	同 六編 倉澤實二	一	五〇	〇四
最新商用通信文	同 七編 桐澤商學士	一	五〇	〇四
最新商用英語	同 八編 野阪商學士	一	五〇	〇四
最新商品學	同 九編 波多野商學士	一	五〇	〇四
青年入店の準備	同 十編 佐々木十九	一	五〇	〇四
此の如き邦文は如何に英譯するか	山川作次郎	一	八五	〇四
幾何學學習の仕方と問題と解き方	三守守校閲 伊藤豐十著	一	七五	〇六

代數學學習の仕方と問題の解き方	千本福隆校 伊藤豐十著	一	七五〇
新式數學公式	理學士 大場昂	一	四五〇
算術模範的解法	伊藤新章郎	品切	
複習的數學講義	伊藤豐十	四	九〇〇
最新物理化學理論及計算法解義	柴田初次郎 齋藤榮	品切	
新式物理學要領	柴田初次郎	一	五五〇
模範新兒童文集	丸山良二	一	七五〇
國定準據高等小學全科自修辭典	國漢文調査會	一	五〇〇
中學校女學校師範學校其他入學受驗法	中等受驗法研究會	品切	
同入學準備新算術	伊藤豐十	一	五〇〇
演壇座談應用自在笑話の泉	伊藤圓定	一	二八〇
科學上より見たる極樂の實在	伊藤圓定	一	一八〇
壇上壇下殺活自在禪話の泉	松本資機	一	一八〇
講演會話逸話と學說	宮地文學士	一	一八〇
禪書挿解どうして悟るか	池上文僊	一	一四〇
修養漫畫氣隨氣まゝ	藤岡了空	一	一六〇
病寃退治養生哲學	藤岡了空	一	一四〇

便利なる書物註文法

▲地方讀書家諸氏の御便利を計り通信販賣致し居り候

御註文の圖書は最も誠實迅速に御取扱可申候

▲東京市内に何百軒とある本屋の發行圖書を別々に註文せば非常の手數と費用が掛つて御損で有升。弊堂へ何でも御註文になればスグ取まとめて御送り致し升。又十錢の本一册でも、かまいませんからどし〳〵御註文の程を願升。（何れも必ず前金に限る）御送金はなるべく振替貯金東京第三四〇九番を御利用下されば通信料も要せず安全に届き升。

東京神田錦町一の十六　二松堂書店

253
198

8.11.24

終